

# 益田氏関連遺跡群 II

1994年3月

益田市教育委員会

## 序

益田市には中世の豪族益田氏に関わる文化財が数多く残されています。雪舟作と伝えられる史跡及び名勝の医光寺と万福寺の庭園、重要文化財の染羽天石勝神社本殿や万福寺本堂、さらには益田氏の居館跡の三宅御土居跡、撫城七尾城跡の県史跡など関連遺跡群が益田地区に集中しています。

さて、益田市では昭和58年の山陰豪雨水害の後に策定された防災都市構想に基づき河川改修と街路整備が進められてきましたが、県史跡三宅御土居跡と街路事業との調整が必要となり、平成2年度から3年度にかけて国庫補助事業三宅御土居跡発掘調査が実施されました。この調査によって遺跡の範囲や保存状態の概略が確かめられ、この結果に基づき現在遺跡の保存と生活道路の確保を両立させた調整が進められつつあり、併せて一帯に分布する貴重な文化財を保存活用するための「歴史を活かしたまちづくり計画」の策定が進められています。

このような情勢のなかで、平成4年度からは国庫補助事業として益田氏関連遺跡群発掘調査に着手し、七尾城跡では、昨年度に本丸跡から礎石建物跡が発見され、今年度も二の段を含めた主郭部において引き続き新たな建物跡が確認されるとともに、多くの貿易陶磁器が出土しました。このようなことから、文献資料に加え発掘調査によっても一時期益田氏が山城に居住していたことが明らかとなり、七尾城の性格、変遷を解明するうえで貴重な成果が得られました。

益田氏関連遺跡群発掘調査は今後も長期的、総合的に行われる予定ですが、平成5年度の調査結果の概要をここに報告し、今後の遺跡保護のための基礎資料になることを期待いたします。

おわりに、今回の調査にあたってご指導いただいた文化庁、島根県教育委員会、調査指導の先生方並びに多大なご協力をいただきました土地所有者の方々に対して厚くお礼申し上げて、報告書刊行のごあいさつといたします。

平成6年3月

益田市教育委員会

教育長 田 中 稔

## 例　　言

1. 本書は、平成5年度（1993年度）に益田市教育委員会が国及び島根県から補助金をうけて実施した益田氏関連遺跡群発掘調査の概報である。
2. 調査は次のような組織で実施した。

調査主体　益田市教育委員会 教育長　田中　稔  
事務局　益田市教育委員会生涯学習課長　田村尚弥、課長補佐  
岡崎松男、文化係長　矢富剛志（平成5年7月31日まで）、  
同 下瀬俊明（平成5年8月1日から）、文化係主事　長  
嶺勝良

調査員　生涯学習課主事　木原　光  
調査補助員　同　臨時職員　井藤裕之  
調査指導　服部英雄（文化庁記念物課文化財調査官）、川原和人（島  
根県教育委員会文化課主幹）、熱田貴保（島根県教育委員  
会文化課文化財係主事）、永原慶二（一橋大学名誉教授）、  
井上寛司（島根大学法文学部教授）、村上　勇（広島県立  
美術館主任学芸員）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古  
研究部助手）

3. 発掘作業、整理作業には次の方々に参加していただいた。  
岩本哲夫、岩本末子、大島　操、大谷ひとみ、大山和子、大畑和子、岡本敬  
子、杉内恵美子、高橋輝吉、高橋好市、豊田香子、中尾貞子、永安ユキエ、  
藤井典子、山地喜三男
4. 発掘調査及び七尾城跡の現況地形測量の実施にあたっては次の方々（敬称略）  
に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表したい。  
大谷義喜、神崎早苗、合資会社岡木材、河野　章、後藤兼光、斎藤幸子、澄  
川房、住吉神社（安達寿人宮司）、染羽天石勝神社（小川治宮司）、峠田開次、  
瀧　保丸、竹本義正、中野未穂、長谷川順一、船木富蔵、船木　泰子、益田興  
産株式会社、益田市立歴史民俗資料館、妙義寺（永見勝徳住職）、矢富新二
5. 本書に掲載した現況地形測量図は株式会社大建コンサルタントに委託して200  
分の1の縮尺で作成した原図の一部を縮小したものである。
6. 掘図中の方位は磁北を示している。
7. 本書の編集、執筆は木原が行った。

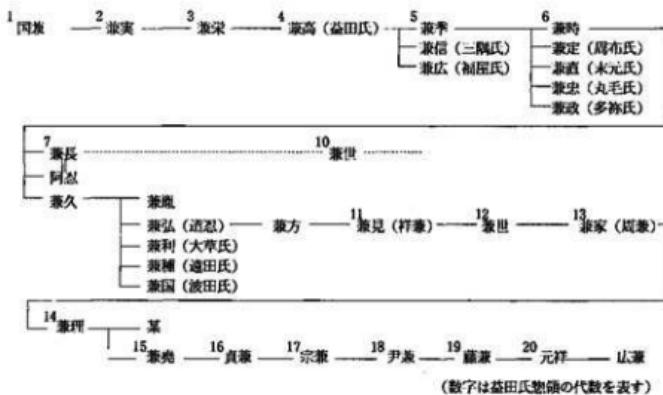
## 目 次

I.	調査に至る経過	1
II.	歴史的な環境	2
III.	平成5年度調査の概要	4
IV.	各遺跡の調査結果	5
1.	旧妙義寺跡	5
2.	勝達寺跡	8
3.	七尾城跡	12
V.	まとめ	26
註		28
文献資料		29・30

## 挿 図 目 次

- 第1図 周辺の遺跡分布図  
 第2図 旧妙義寺跡調査区配置図  
 第3図 勝達寺跡調査区配置図  
 第4図 七尾城縄張図  
 第5図 本丸跡・二の段調査区配置図  
 第6図 二の段1区・2区平面図及び断面図  
 第7図 二の段4区・5区平面図

益田氏略系図





## I. 調査に至る経過

益田市では、昭和58年7月の山陰豪雨水害により策定された防災都市構想に基づき、三宅御土居跡の東寄りを南北に通る幅3mほどの市道を12mに拡幅しようとする都市計画街路事業が計画されたため、平成2年度から3年度にかけて、遺跡の範囲と保存状態の確認を目的として県史跡三宅御土居跡発掘調査が行われた。三宅御土居跡についてはこれまで、発掘調査が行われておらず、その実態は不明確であったが、調査の結果、周辺部に設定したトレンチで堀跡及び川跡が確認され、土壘内側でも近世を含む遺構が予想以上に残っていることが確かめられ、また、出土した貿易陶磁器から遺跡の初現は12世紀に遡る可能性が出てきた。<sup>(1)</sup> 2年度にわたる発掘調査により街路事業との調整に必要な基本的なデータは得られ、この結果に基づいて現在は遺跡の保存活用と生活道路の確保を両立させる方向を基本として調整が進められつつある。

これに引き続き、益田市教育委員会では平成4年度からは三宅御土居跡と一体的な機能を持つ県史跡七尾城跡を主な調査対象とし、3年継続事業の予定で益田氏関連遺跡群発掘調査に着手することとなった。

平成4年度における同調査事業は七尾城跡と平安初期の創建といわれ、廃仏毀釈により廃寺となった勝達寺跡の2遺跡の発掘調査を行っている。勝達寺跡は天石勝神社の西の台地上に推定されているが、3箇所において発掘調査を行った結果、近世の勝達寺を含め寺院遺構は確認されず、出土遺物も江戸後期以降のもので、中世以前に遡るものは皆無であった。

一方、七尾城跡は昭和58年に主郭部分に礎石が存在することが確かめられていたが、それを再確認するために調査を実施した結果、本丸跡北端で礎石建物跡が確認され、付近からは瓦片が多数出土したことから瓦葺きの建物であったことが明らかとなった。また、この礎石建物の検出面以下にも列石や炉跡などの遺構が存在することが確かめられ、改修の変遷を解明する手がかりを得ることができた。

平成5年度は、勝達寺跡の調査を継続し、新たに旧妙義寺跡の調査も加え、さらに七尾城跡については、本丸跡の他の部分と二の段の主郭部分を調査対象とし、建物跡の検出を含め、曲輪の構造、変遷の過程を解明する目的で調査を実施した。

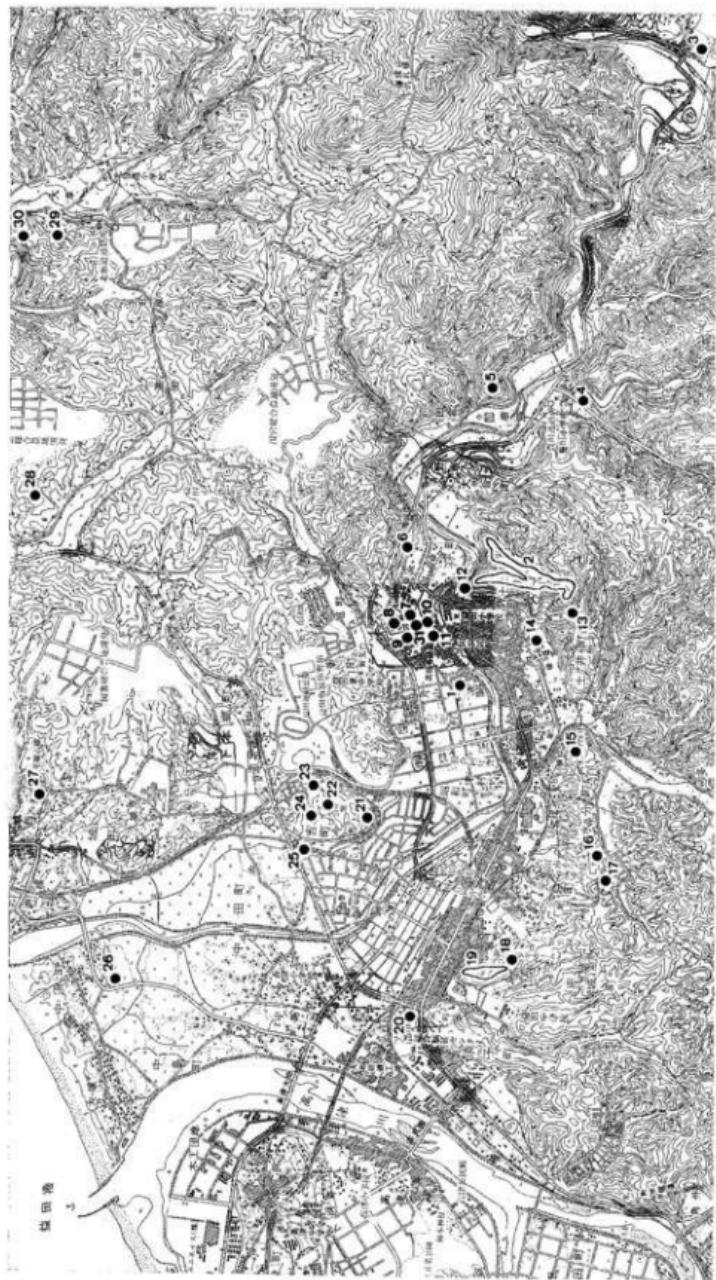
## II. 遺跡の位置と歴史的な環境

益田市は島根県の最西端に位置する。山口県と県境を接し、市域の北は日本海に面し、背後は丘陵地に囲まれる。市街地は、益田川と高津川の二大河川によって形成された肥沃な益田平野を中心に広がり、人口はおよそ5万2千人で、国道と鉄道が分岐する交通の要衝地でもある。平成5年7月には待望の石見空港が開港し、県西部の中核都市としての発展が望まれている。

さて、古来からの恵まれた気候と地勢により、益田市には古代から数多くの遺跡が存在する。繩文後晩期の安富王子台遺跡、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳、全長約100mの国史跡スクモ塚古墳、市指定の全長約50mの前方後円墳小丸山古墳、やはり前方後円墳で全長92mを測る大元1号墳、横穴式石室を持つ秋葉山古墳、群集墳である県史跡鶴ノ鼻古墳群、片山横穴群、北長迫横穴群などが良く知られた遺跡といえよう。

中世に入ると益田氏と関連のある遺跡が数多く存在する。特に、益田市の中でも中世の遺跡や文化財が集中して残る益田地区には、益田氏の居館跡である県史跡三宅御土居跡や拠城であった県史跡七尾城跡の他、式内社で本殿が重要文化財に指定されている染羽天石勝神社、また、同社の別当寺勝達寺跡、雪舟作と伝えられる史跡及び名勝医光寺庭園や万福寺庭園、さらに文永年間の創建といわれる妙義寺など益田氏との関わりが特に深い神社仏閣が集中して残されている。また、<sup>(2)</sup>三宅御土居以前の益田氏の居館跡推定地として上久々茂土居跡、大谷土居跡があり、乙吉町の今市には益田氏が行っていた朝鮮貿易や日本海貿易の拠点としたといわれる市史跡今市舟着場跡がある。さらに、山城跡についても市域全体に30以上分布している。<sup>(3)</sup>

益田氏は、平安後期の永久年間に石見国府の国司として下向した藤原鎌足の後裔国兼を始祖とし、建久年間頃に4代兼高が益田荘を本拠地として以来約400年間にわたって石見を拠点に勢力を誇ったが、関ヶ原の役の後は、20代元祥が長門須佐に移り、益田は高津川を藩境として浜田藩と津和野藩とに分かれ、近世を迎える。



1. 熊史跡三字御土居跡 2. 熊史跡七尾城跡 3. 上久々浅土居跡 4. 大谷土居跡 5. 大谷城跡 6. 医光寺（庭園は国史跡及び名勝）7. 染羽大石  
勝神社（本殿は国重要文化財）8. 秋葉山古墳 9. 片山樹穴群 10. 市史跡益田藤兼見墓 11. 万福寺（庭園は国史跡及び名勝、本堂は国重要文化財）  
12. 市史跡益田藤兼見墓 13. 市史跡益田藤兼見墓 14. 炙燒寺境内地 15. 須賀城跡 16. 水分経塚 17. 水分経塚 18. 赤城跡 19. 北長道橋穴群 20. 高川  
城跡 21. 萩ヶ松城跡 22. 小丸山古墳（前方後円：50 m）23. 四家山古墳群 24. 上の山城跡 25. 市歴史市歴史跡 26. 県有形文化財石造十一重塔  
(鎌倉時代) 27. 国史跡スクモ原古墳（前方後円：100 m）28. 大元1号墳（前方後円：89 m）29. 黒有形文化財木造薬師如来（延慶四年：  
東開庵）30. 大草城跡 31. 駿達寺跡

第1図 周辺の遺跡分布図

### III. 平成5年度調査の概要

今年度の益田氏関連遺跡群発掘調査は旧妙義寺跡、勝達寺跡、七尾城跡の3遺跡を調査対象とし、トレンチによる部分的な発掘調査を実施した。

旧妙義寺跡発掘調査は、県史跡七尾城跡の付指定となっている妙義寺境内地において本堂改築工事が計画されたため、遺跡名を旧妙義寺跡として、5箇所の調査区を設定して近世以前の寺院跡の範囲と保存状態の確認に努めた。調査面積は39m<sup>2</sup>である。

勝達寺跡については、昨年度の調査で遺構が確認されなかったため、引き続き追加調査を行い、平地部分とさらに入口が推定された斜面に6箇所の調査区を設定して近世をも含めた勝達寺跡の遺構の確認のため発掘調査を行った。調査面積は111m<sup>2</sup>であった。

七尾城跡は昨年度本丸跡北端において礎石建物跡が確認されたため、二の段を含めた主郭部分において、建物跡の有無など曲輪の構造とその保存状態の確認のための発掘調査を実施した。本丸跡と二の段それぞれに5箇所のトレンチを設け、146m<sup>2</sup>の発掘を行った。

旧妙義寺跡及び勝達寺跡の発掘調査では明瞭な遺構は確認されなかつたが、七尾城跡では、遺構の精査はできなかつたものの本丸跡南端から明代の染付片が集中的に出土したことから建物跡の存在が推定され、また、二の段北端でも礎石建物跡の一部が発見され、さらに二の段南端部においても現況の曲輪以前の段階の遺構と考えられる敷石面と溝跡が検出されるなど貴重な成果が得られた。

発掘作業の他、七尾城跡については本丸跡の南側の曲輪群と、二の段から良の出丸までの北北東に伸びる尾根上に分布する曲輪群部分の合計21,000m<sup>2</sup>の地形測量を行い、縮尺200分の1、等高線25cmの詳細な現況地形図を作成した。昨年度の本丸跡一帯の測量範囲1,600m<sup>2</sup>とあわせ、全体の測量予定範囲37,000m<sup>2</sup>のうち22,600m<sup>2</sup>の地形測量図を作成した。さらに、関連資料調査として妙義寺、天石勝神社所蔵の文書、絵図等の所在調査も行っている。

現地調査期間は、旧妙義寺跡が平成5年10月28日から11月12日まで、勝達寺跡は平成5年12月17日から平成6年3月9日まで、七尾城跡は平成6年2月18日に着手し、埋戻しを含め3月31日に終了した。なお、現地説明会は3月27日に開催した。

現地指導は、平成5年11月6日(村上)、11月11日(熱田)、平成6年2月28日(井上)、3月3日(村上、熱田)に受け、調査指導会は第1回を平成5年12月21日・22日(永原、井上、村上、熱田)に、第2回を平成6年3月16日・17日(永原、井上、千田、熱田)に開催した。

### III. 平成5年度調査の概要

今年度の益田氏関連遺跡群発掘調査は旧妙義寺跡、勝達寺跡、七尾城跡の3遺跡を調査対象とし、トレンチによる部分的な発掘調査を実施した。

旧妙義寺跡発掘調査は、県史跡七尾城跡の付指定となっている妙義寺境内地において本堂改築工事が計画されたため、遺跡名を旧妙義寺跡として、5箇所の調査区を設定して近世以前の寺院跡の範囲と保存状態の確認に努めた。調査面積は39m<sup>2</sup>である。

勝達寺跡については、昨年度の調査で遺構が確認されなかったため、引き続き追加調査を行い、平地部分とさらに入口が推定された斜面に6箇所の調査区を設定して近世をも含めた勝達寺跡の遺構の確認のため発掘調査を行った。調査面積は111m<sup>2</sup>であった。

七尾城跡は昨年度本丸跡北端において礎石建物跡が確認されたため、二の段を含めた主郭部分において、建物跡の有無など曲輪の構造とその保存状態の確認のための発掘調査を実施した。本丸跡と二の段それぞれに5箇所のトレンチを設け、146m<sup>2</sup>の発掘を行った。

旧妙義寺跡及び勝達寺跡の発掘調査では明瞭な遺構は確認されなかつたが、七尾城跡では、遺構の精査はできなかつたものの本丸跡南端から明代の染付片が集中的に出土したことから建物跡の存在が推定され、また、二の段北端でも礎石建物跡の一部が発見され、さらに二の段南端部においても現況の曲輪以前の段階の遺構と考えられる敷石面と溝跡が検出されるなど貴重な成果が得られた。

発掘作業の他、七尾城跡については本丸跡の南側の曲輪群と、二の段から良の出丸までの北北東に伸びる尾根上に分布する曲輪群部分の合計21,000m<sup>2</sup>の地形測量を行い、縮尺200分の1、等高線25cmの詳細な現況地形図を作成した。昨年度の本丸跡一帯の測量範囲1,600m<sup>2</sup>とあわせ、全体の測量予定範囲37,000m<sup>2</sup>のうち22,600m<sup>2</sup>の地形測量図を作成した。さらに、関連資料調査として妙義寺、天石勝神社所蔵の文書、絵図等の所在調査も行っている。

現地調査期間は、旧妙義寺跡が平成5年10月28日から11月12日まで、勝達寺跡は平成5年12月17日から平成6年3月9日まで、七尾城跡は平成6年2月18日に着手し、埋戻しを含め3月31日に終了した。なお、現地説明会は3月27日に開催した。

現地指導は、平成5年11月6日(村上)、11月11日(熱田)、平成6年2月28日(井上)、3月3日(村上、熱田)に受け、調査指導会は第1回を平成5年12月21日・22日(永原、井上、村上、熱田)に、第2回を平成6年3月16日・17日(永原、井上、千田、熱田)に開催した。

## IV. 各遺跡の調査結果

### 1. 旧妙義寺跡

萬歳山妙義寺は益田市七尾町に所在する。標高約80mの萬歳山の北側山裾一帯を境内地とし、西には島根県立益田高等学校が隣接し、前面は都市計画街路中島染羽線が東西に走り、さらにその北には七尾城の堀の名残りといわれる丸池からの川跡が残る。

妙義寺の創建は文永年間（1264～1274）といわれ、当初は臨済宗で妙義庵と称したといわれる。その後、応永年間（1394～1427）の始めに益田氏13代兼家が再興して自らの菩提寺とし、直庵宗觀を妙義庵に据えて寺領370余石を寄進した。このころ曹洞宗に改めたといわれる。その後も兼理、兼堯、藤兼、元祥によって寺領が寄進され、特に藤兼は大寧寺の開翁殊門、黄山殊梅を招いて寺法を定め、<sup>(4)</sup>厚く庇護したことによって15ヶ寺の末寺を持つほどに隆盛した。

さて、発掘調査は本堂の改築に伴うものであった。当初の計画では調査を予定していなかったが、県文化課と協議を進めた結果、益田氏関連遺跡群発掘調査の内で対応することとし、既述のとおり鎌倉時代に遡る寺院であることから遺跡名を旧妙義寺跡として調査を実施した。調査は本堂部分を中心に5箇所の調査区を設定して行ったが、部分的に整地層を完掘したのは3箇所である。調査前の整地面は標高約7mであった。

#### (1) 第1調査区（幅2.0m、長さ4.0m、面積8m<sup>2</sup>）

本堂解体後の整地面から約1mの深さまでは山石混じりの整地層があり、若干色や質の異なる土層も混じるが、特に段階的に整地されたものではなかった。これより下は徐々に暗茶褐色土と砂層があり、深さ1.5m以下は青灰色ないし暗黒灰色の粘質土層となっていた。なお、遺構は発見されなかった。

#### (2) 第2調査区（幅2.0m、長さ6.0m、面積12m<sup>2</sup>）

地表から約60cmほど掘り下がったが、遺構は検出されず、山石を多く混入する整地層がさらに下に続くと考えられたため、これ以上の発掘はしなかった。

#### (3) 第3調査区（幅2.0m、長さ4.0m、面積8m<sup>2</sup>）

解体前の本堂のほぼ中心部の位置である。全面をほぼ60cmの深さまで発掘した後、西側の半分をさらに掘り下げた。その結果、下層ほど混在する山石は少なくなるが、地表から1.6mまでは一体的な整地による土層であり、さらにその下は暗

青灰色砂層であった。この調査区では整地層の下層は粘質土とはならず、第1調査区の状況とはやや異なっていた。

(4) 第4調査区（幅2.0m、長さ2.0m、面積4m<sup>2</sup>）

地表から60cmないし80cmの深さまで発掘したが、山石混じりの堆積層が下に統くと判断されたため、さらに掘り下げるることはしなかった。

(5) 第5調査区（幅2.0m、長さ3.5m、面積7m<sup>2</sup>）

解体前の本堂と幼稚園の便所の間の位置に設定した調査区である。表土を除去した段階で東側に暗渠に伴うコンクリート構造物があったため、これを避けて西側を掘り下げた。その結果、地表から深さ約90cmまでは割石ないし山石が多く、それ以下は暗茶褐色粘質土が50cmから80cmの厚みで堆積し、さらにその下層は暗青灰色粘質土であった。

さて、5区ではこの暗青灰色粘質土上に列石が発見された。列石は20cmから35cm大の割石からなり、底部から列石の最高部までの高さは45cmほどで、面を西側に揃え、ほぼ南北方向に伸びていくようである。この列石の面は現在の本堂とは逆の方向に揃っており、東側からの区画を意図したものである。

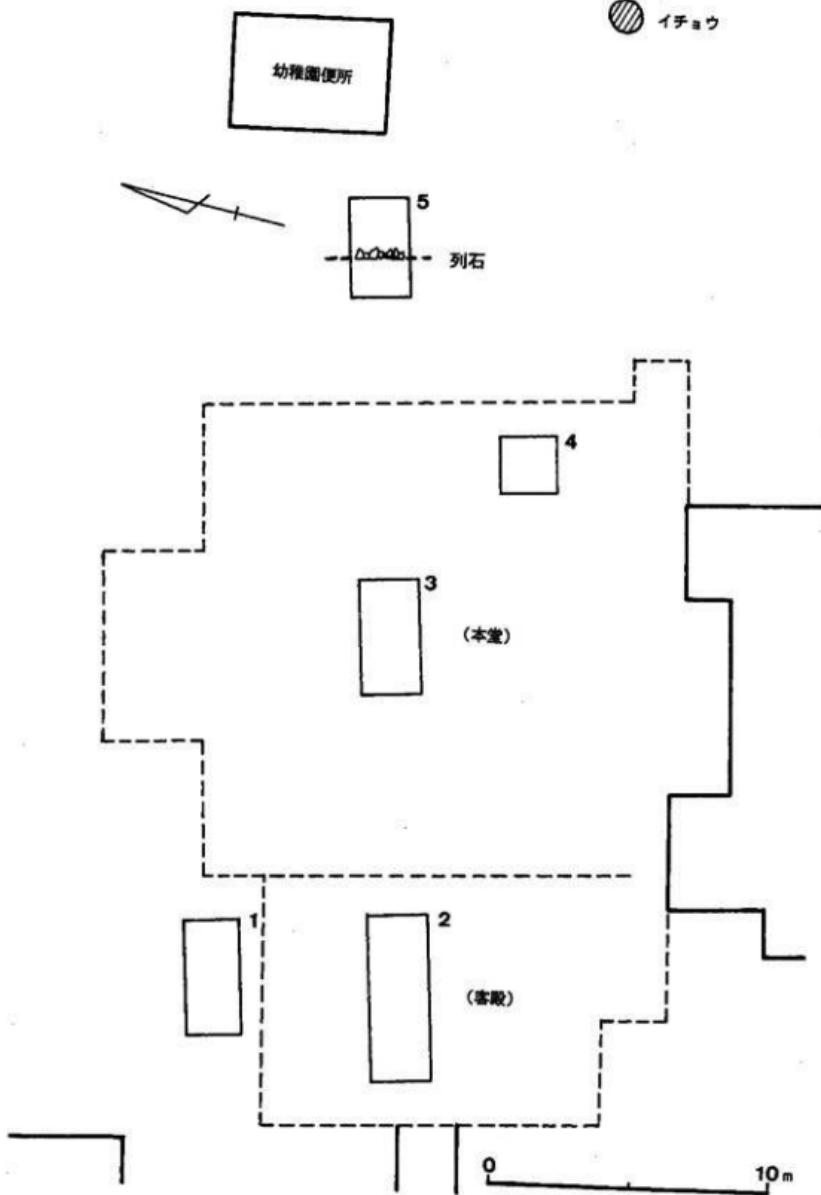
各調査区の発掘結果は以上のとおりであるが、既存の本堂が建つ整地層は、山石混じりの土砂が多少の性質の違う土も含みながらも短期間に一度に整地が行なわれたと考えられる状態で堆積しており、時代を経て徐々に整地が重ねられたような状況ではなく、火災に遭ったような痕跡も発見されなかった。

さらに、3箇所の調査区では部分的にこの整地層の下まで掘り進めたが、極めて粘性の強い粘質土ないし砂層が確認されたことによって、一帯は必ずしも安定した地盤ではなかったようである。

調査の結果、近世の妙義寺を含む旧妙義寺跡については明確な遺構は確認できなかったが、第5調査区で確認された列石は発見された位置と面の向きから、東側に区域を必要とすべきものがあったことをうかがわせる。時期も性格も不明で、堅固なものではないが、旧妙義寺の境内地に関わる遺構の可能性も残される。

遺物については整地層の上層から近世以後の陶磁器、瓦片が出土しているが、中に須恵器、南北朝期の備前焼、近世初頭の染付がわずかに含まれていた。

イチヨウ



第2図 旧妙義寺跡調査区配置図

## 2. 勝達寺跡

勝達寺は、神亀二年（725）の創建といわれる染羽天石勝神社の別当寺として承平元年（931）に創建されたと伝えられている。

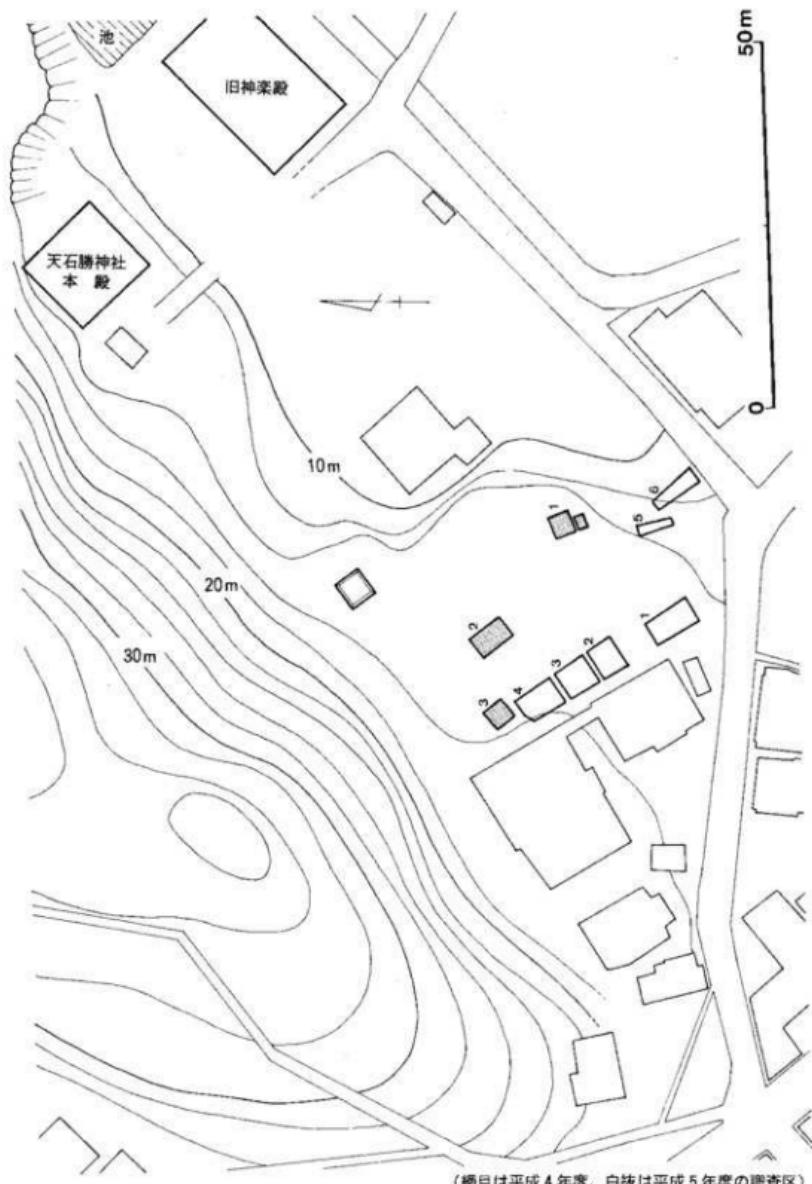
勝達寺は淨藏大徳によって社殿西方の高台に建立された古義真言宗の寺院で、高野山金剛峰寺の支院正智院役寺金剛院の末寺となり、次第に熊野権現の祭神をも天石勝神社に奉斎するようになったという。以来、神社は瀧藏山の山号を持ち、瀧藏権現と通称するようになり、別当寺は瀧藏山勝達寺と呼ばれるようになった。瀧藏山は神社背後の秋葉山から医光寺背後にかけての一連の山名である。

勝達寺は中世には益田氏の庇護を受け、近世に至っても社領は歴代將軍から朱印状を得ていたが、明治維新に伴い廃仏毀釈で廃寺となつた。<sup>(5)</sup>

勝達寺に関する資料は少ないが、益田市誌掲載の古図、江戸末期の絵図などがある。なお、前者については原資料の所在が不明である。さらに、勝達寺に関する近世の文献資料が天石勝神社に保管されており、この中に天石勝神社と勝達寺の建物に関する資料があるので言及しておきたい。これは、延亨三年（1746）五月二十日付けの覚書で、当時、境内地には瀧藏権現御殿、同拝殿、春日明神五社、牛玉堂、王子堂、稻荷堂、本堂、護摩堂、大門、庫裏などの建物があったことが記され、それぞれの規模と屋根の状態が記録されている。これによると勝達寺の本堂は七間六間の柿葺きであったことがわかる。なお、勝達寺の本尊木造不動明王坐像は廃寺となる際に運び出され、現在は神奈川県鎌倉市の極楽寺に納められ、重要文化財の指定を受けている。<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup><sup>(8)</sup><sup>(9)</sup>

さて、平成4年度の調査では平地部分に3箇所の調査区を設定して発掘したが、<sup>(10)</sup>寺院跡に關係する遺構は確認されず、遺物も江戸末期以降のものであった。しかし、既に記述したような資料を参考にすれば、なお未調査部分に遺構が存在する可能性があるため引き続き今年度も調査を継続して実施した。

勝達寺は上記の資料や地元の伝承から天石勝神社の西、椎山と秋葉山の山裾の間の平地部分に推定されているが、推定地の西寄りはすべて宅地となっている。調査対象地は最も広い部分となる推定地の東端で、現在は畠地及び荒地となっており、標高15mあまりの平地である。今回はこの部分のなかで西側の民家に沿って4箇所、さらに、南東の斜面に2箇所の調査区を設定した。



第3図 勝達寺跡調査区配置図

(1) 第1調査区（幅4.3m、長さ7.5m、面積32.3m<sup>2</sup>）

市道側の、平地の縁辺部付近に設定した調査区で、現況は数年前に土蔵が解体された後徐々に畠地になっている。かつてこの一帯に南北方向に庫裏が建っていたと伝えられる。

調査の結果、南側は現況面にはほとんど近い標高15.1mの高さで岩盤が表れ、これは北向きに徐々に下がり、土質の地山に変化していたが、勝達寺跡に関する遺構は発見できず、比較的最近まで使用されていたという便所跡や焼土面、不規則なピット、割石による溝状遺構などが確認されたのみである。最も低くなる北東隅での地山の標高は14.5mであった。

(2) 第2調査区（幅5.3m、長さ3.2m、面積17m<sup>2</sup>）

第1調査区から4.5m離れた北側に設けた調査区である。発掘の結果、南西隅に性格不明の集石遺構があったが、現在の耕作土の床土層を掘り込んでいるため比較的最近のものと考えられた。その他は特に遺構は認められず、石混じりの堅く締まった黄褐色土の地山が調査区の東から西に向けて下がっていた。地山の標高は東側が14.6m、西壁沿いの最も低い部分は14.2mであった。

(3) 第3調査区（幅4.8m、長さ4.0m、面積19m<sup>2</sup>）

石混じりの黄褐色の地山が北側及び東側から調査区の南西隅の方向に下がり、堆積層中に20cmから40cm大の比較的大きめの割石や川原石があったが、遺構に伴うものではなかった。地山の標高は北東隅で14.6m、南西隅で14.3mを測る。

(4) 第4調査区（幅4.5m、長さ5.2m、面積23.4m<sup>2</sup>）

発掘の結果、遺構は発見できなかった。北及び東側で標高14.9mでは平坦に確認された石混じり黄茶褐色の地山が南西隅でやや下がっており、その部分の標高は14.5mであった。

(5) 第5調査区（幅1.2m、長さ5.0m、面積6m<sup>2</sup>）

昨年度と今年度の平地部分の調査区で遺構が確認されなかつたため、勝達寺の入口を確認する目的で台地の斜面部分で2箇所の調査区を設定して発掘を行った。第5調査区は、廃寺後に建てられ、現在はすでに解体された民家の入り口として使用されていた道部分に設けた。

調査の結果、現在の南向き斜面に一致するように斜め方向の何種類かの土砂が堆積しているのが確認された。途中、調査区のほぼ中央に比較的大きな石がまと

まっていたため、これを残して掘り下げたところ、スロープ状の堅い面がこの集石の南北に確認された。北側は標高12.3mから11.6m、南は標高12.5mから11.7mまで南東方向に下がっていくが、集石の北側と南側とではこれらの面は連続していない。この盛土による堅い斜面は機能も不明で遺構とは今のところ考えにくい。

#### (6) 第6調査区（幅1.8m、長さ7.4m、面積13.3m<sup>2</sup>）

台地斜面の竹藪の中に設定した調査区である。平地の東側斜面の状態と比較して、この部分はやや南向きに緩斜面になっていることから、勝達寺の入口に関わる遺構の存在が推定されたため、発掘を行った。

その結果、南向きのスロープ状の遺構が確認され、この斜面の東端は調査区の東壁沿いで明らかに急角度で削られており、人工的なものである。黄褐色土が堅く締まった状態で、東側の削り出し部分の観察からその下層は割石混じりの土層である。このスロープは標高12mから10.1mまで緩やかに下がる斜面であるが、第5調査区で確認されたものとは方向と標高とが一致しない。なお、スロープ面の南端近くに円形の焼土が発見されたが性格は不明である。

以上のとおり、今年度の発掘調査でも勝達寺に関わる遺構を確認することができなかった。その中で、遺構としては第6調査区において発見されたスロープ状の遺構が唯一であるが、寺院の入口とするには構造的に難があろう。

遺物については、第1調査区から第5調査区にかけての表土からいぶし瓦片や陶磁器片が若干出土し、第6調査区からは、特に南端部分のスロープ面以上に瓦片や陶磁器片が多量に発見されたが、これらの遺物は幕末以降のものが大半で、江戸前期まで遡るものは出土していない。

調査対象とした地域は勝達寺推定地の中でも最も広い場所であり、2年にわたる調査によって遺構が存在すれば確認できる調査区の配置を行ったと考えられるが、にもかかわらず遺構が発見されなかつことは、廃寺以後に徹底的に土地が改変された、あるいは調査対象地よりもさらに西側の宅地部分に存在する、さらには勝達寺の推定地そのものが誤っている、などと考えることができる。今後は絵図や地籍図、文献資料からの当時の一帯の歴史的景観を復元する作業が必要となろう。

### 3. 七尾城跡

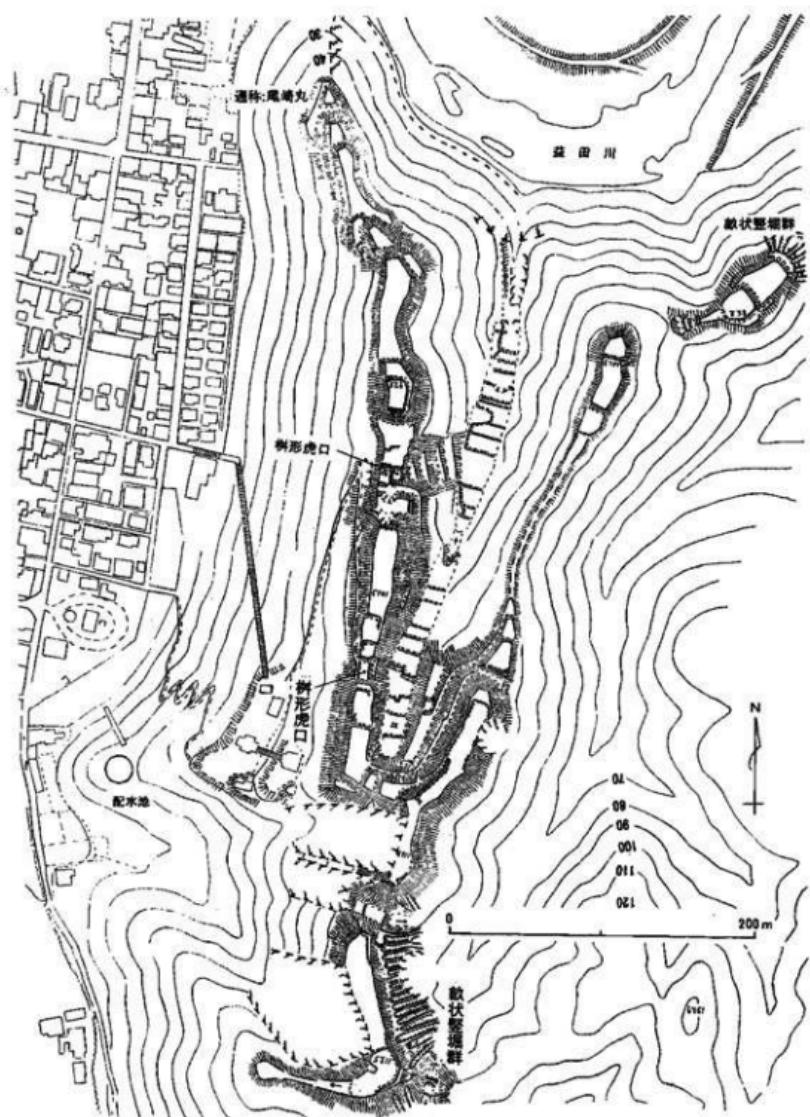
七尾城跡は益田氏が拠城とした山城跡である。<sup>01</sup>益田川が蛇行して平野部に流れ出すあたりの左岸、市街地に面した住吉神社背後の丘陵上に位置する。益田川を挟んで居館跡三宅御土居跡とは直線距離で約700 mほどである。

七尾城の曲輪群は、最高部にあたる標高約118 mの通称本丸跡以南の尾根と、それから北に向けてY字状に伸びる主に3つの尾根上に分布し、原山の丘陵に統く城域南端の土橋から益田川を見下ろす通称尾崎丸あるいは艮の出丸の先端部までの南北の全長は約600 mを測る。これらの尾根上には大小40あまりの曲輪があり、要所には土壘、堀切りなどを備え、本丸跡の南側の曲輪東斜面には連続して17本の、さらに艮の出丸には放射状に7本の歛状空堀群を設けている。大手は二つの尾根に挟まれた北向きの谷あいに推定されており、この谷の通称厩の段近くには直径1.2 mの割石積みの井戸馬釣井が残る。

石西の雄益田氏代々の居城跡であり、かつ戦国期前後の山城跡として稀に見る整った構えを持つ城跡という事由で、さらに寺域に七尾城の堀の名残といわれる丸池を留め、13代兼家が再建し菩提寺とした妙義寺境内地をも含めて昭和47年3月31日付け島根県教育委員会告示第6号で「七尾城跡付妙義寺境内」として島根県史跡に指定された。指定地番は七尾城跡が46筆、妙義寺境内が5筆で、台帳上の面積はそれぞれ277,151 m<sup>2</sup>、5,684 m<sup>2</sup>である。なお、城域内に未指定部分が3筆あり、また、七尾町と大谷町の町境となる艮の出丸部分は指定地に含まれておらず、一方では城域の最も南端の土橋の谷筋から東側の広大な面積が城に関わる遺構は確認されていないものの指定地に含まれている。これは、指定時に地番による指定を行なった結果と考えられる。指定地の土地所有者は益田市と住吉神社の他は、大部分が個人で一部事業所である。

七尾城は益田城とも呼ばれるが、文献資料によれば「益田城」、「七尾城」、「七尾御城」や「御城山」と表記され、城の部分や曲輪の名称については「北尾崎<sup>02</sup>木戸<sup>03</sup>」、「滝尾<sup>04</sup>」や「大手之曲輪<sup>05</sup>」などが見える。さらに、幕末の資料によれば「千疊敷<sup>06</sup>」、「天守台<sup>07</sup>」、「馬筒井<sup>08</sup>」と当時言い伝えられていた部分があつたらしい。なお、「本丸跡<sup>09</sup>」、「二の段<sup>10</sup>」、「厩の段<sup>11</sup>」や「太鼓の段<sup>12</sup>」など現在使われている曲輪の呼称は便宜的に比較的最近付けられたものである。

築城の時期については建久4年（1193）に益田氏4代兼高が築いたとする説や元



(『島根考古学会誌』第8集 寺井毅「石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城の斜状堅堀群についての考察」から引用)

第4図 七尾城縄張図

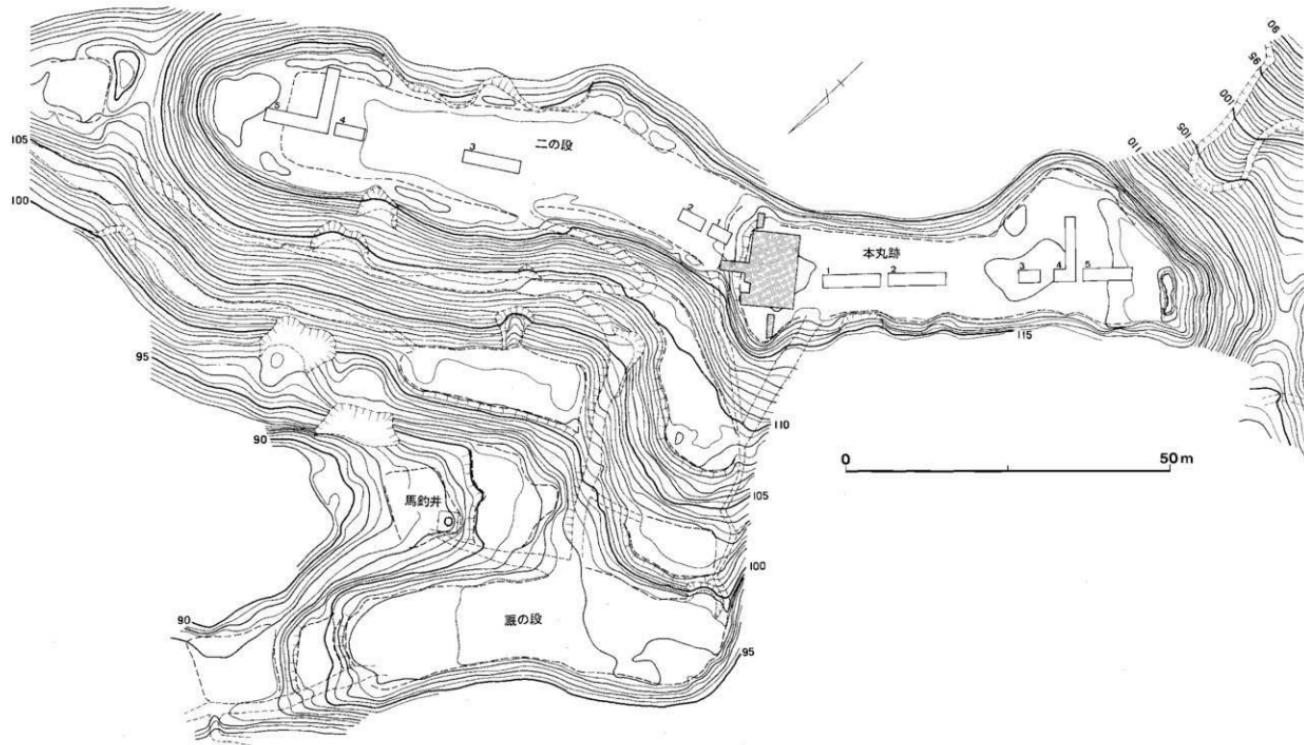
寇に備え6代兼時が文永の役から永仁元年（1293）の間に築城したとする説など諸説があるが、明確ではない。弘治元年（1555）から同三年にかけて19代藤兼が毛利氏と敵対した頃に大規模な改修が行われて、現存する最終的な形態になったといわれる。七尾城が戦場となったのは、延元元年（1336）に三隅氏が攻め寄せて大手口で合戦があったことが唯一で、史料に残る。

益田氏は南北朝期の11代兼見以来大内氏に従っていたが、天文12年（1551）に大内氏が滅亡した後は、結局敵対した毛利氏に属することとなる。関ヶ原の役の後、毛利輝元が防長二州に減封されると、20代元祥は毛利氏への忠誠から長門須佐に移り、知行高1万2千石を与えられて長州萩藩の永代家老となった。これに伴い七尾城は廃城となったが、元祥は家臣佐々木神四郎を七尾城留守居役として残し、その管理は元和年間まで及んだという。なお、県指定有形文化財の医光寺総門はかつて七尾城の大手門であったと伝えられている。

さて、七尾城跡については、昭和58年にツツジの植栽に伴い本丸跡と二の段の北端で礎石らしきものが存在することが確認され、また以前から本丸跡東側斜面から瓦、壺、灯明皿、足鍋、摺鉢などの破片や鉄滓が採集されてきたことなどから建物跡が存在すると考えられてきた。

これまで発掘調査は行なわれていないが、平成4年度から益田氏関連遺跡群発掘調査の一環で調査が開始され、初年度は本丸跡北端で長辺10m×短辺4mの長方形の礎石建物跡が検出された。礎石は30cmから50cmの偏平な川原石を等間隔に並べ、その間は割石を挟んでいた。また、中央に幅2mの間隔で列石があり、これは長辺の礎石列より南北に1mほど突出していた。礎石の面は内向きに描い、内側には全面砂利が敷かれており、この礎石の南側からは多量の瓦片が出土したことから、瓦葺きの建物であったと考えられる。建物の性格については、その位置から門的な性格を備えた建物で、居住に関わる建物とは考えにくい。さらに、サブトレレンチによりこの礎石の下層からも列石や鍛冶に伴うと考えられる炉跡が<sup>21</sup>発見されたことにより複数の遺構面が存在することが明らかとなった。

今年度の調査は、さらに本丸跡と二の段を含めた主郭部分の構造を解明する目的で実施した。南北に伸びる両曲輪の南北端と中央部に調査区を配置して発掘を行ったが、完掘できなかった調査区もある。調査面積は本丸跡は78m<sup>2</sup>、二の段は68m<sup>2</sup>で合計146m<sup>2</sup>である。以下本丸跡の調査区からそれぞれの結果について概略



(網目は平成4年度調査区)

第5図 本丸跡・二の段調査区配置図

を述べる。

本丸跡の現況は、全長約68 m、幅は中央部分で約12 mを測り、北端は東へやや突出し、幅は20 mである。標高は118 m前後で平坦である。南端には土壘が存在し、現在はその一部が高さ2 mまで残るが、大部分は失われて、わずかにその基底部分が若干の高まりや段差で残る。さらに、曲輪の南寄り部分は東側が大きく張り出してかなり広い平場が確保されている。

(1) 本丸1区(幅2.0 m、長さ9.0 m、面積18 m<sup>2</sup>)

本丸跡における調査区は曲輪の主軸線上を基本とし、1区の北端は昨年度の調査区の南端から約5 m離れた位置から南へ向けて設けた。調査区の全体をほぼ地山面まで掘り下げた結果、特に明確な遺構は発見されなかった。なお、調査区の方向に対して直行するように割石が並んでおり、一定の規則性が認められたが、地山面よりは浮いた状態で安定も良くない。また、その石列のすぐ北で、東壁沿いに地山のくぼみがあり、ここからは土師質土器の比較的大きな破片が出土している。地山は地表より20 cmから25 cmの深さ、標高約117.6 m前後で確認されたが、北端は地山面が10 cm程度下がっていくようである。なお、南東隅部分に幅50 cmのサブトレンチを設定し、地表から約70 cmの深さまで地山の状態を確認した結果、この部分の地山は軟質化した20 cm以下の礫を含む土層であった。

遺物は、土師質土器の他、平瓦や丸瓦の瓦類、染付、釘状及び鏑矢などの鉄製品が出土したが、特に土師質土器片や瓦片を中心に調査区の北端部分にかなり密な状態で出土している。本丸跡における瓦片は曲輪の北寄りほど多く、南寄りはほとんど出土しないが、染付については1区では1片のみで、後述するように本丸跡の南端に多く、北寄りには極めて少ない。

(2) 本丸2区(幅2.0 m、長さ9.0 m、面積18 m<sup>2</sup>)

曲輪のほぼ中央部にあたり、発掘の結果、遺構は発見されなかった。地表より15 cmから20 cmの深さ、標高117.6 mあまりで地山に至り、明黄色土の地山面はほぼ平坦であった。

遺物は、土師質土器、瓦、鉄製品、磁器、土錘が出土しているが、遺物の量は1区と比較して少なくなる。瓦は丸瓦と平瓦があるが、1区のものより破片が小さく、量も減る。鉄製品としては釘類の他頭部に輪を持つ金具もあった。磁器は白磁1片、染付2片で、土錘も1点出土した。

(3) 本丸 3 区（幅2.0 m、長さ3.4 m、面積8 m<sup>2</sup>）

曲輪の南寄りの位置で、遺構は発見されなかった。地山は明黄色土で、標高約117.8 mで平坦である。

遺物としては、土師質土器の他染付2片、青磁1片、甕と思われる体部の土器片などが出土している。なお、3区以南からは瓦は発見されていない。

(4) 本丸 4 区（幅2.0 m、長さ3.5 m 幅1.5 m、長さ8.0m 面積19m<sup>2</sup>）

4区、5区を設定した一帯は曲輪の東側が大きく張り出し、本丸跡では北端部とともにかなり広い平坦面が確保されている部分で、地表面に多くの割石が露頭している。

東側にもL字状に調査区を拡張して遺構の確認に努めたが、曲輪の主軸方向の部分は混在する割石は少なかったものの礎石等の遺構は発見されず、部分的に設けたサブトレーナーで明黄色の地山面上に直径25 cmのピットを1箇所確認したのみである。この部分の地山は標高約117.7 mで平坦である。一方、東方向に伸ばした拡張区は表土から2層の堆積土を発掘した後、南側半分を明黄色土の地山まで掘り下げたところ、表土以下に割石が多く混在していた。これらの除去整理を一部試みたが、最終的に遺構は確認できないまま調査を終了している。東拡張区の東端の地山は標高約117.5 mで地山面は緩やかに下がっている。

遺物は、土師質土器が調査区の全面に多数出土し、白磁、青磁、染付など磁器類も30片近く出土した。鎧蓮弁文を有する青磁碗は1点、白磁及び染付は口縁部、底部の破片が多く、基筒底の染付もあった。他に鉢類や大型の壺などの土器類、備前焼の甕口縁部、釘や輪状部で連結された鉄製品も発見されている。遺物の出土状況に粗密はなく、全体的に出土し、既述の調査区と比較して多量である。

(5) 本丸 5 区（幅2.0 m、長さ7.5 m、面積15 m<sup>2</sup>）

本丸跡の南端には土塁の外側部分が高さ2 mほど残り、その北には土塁の基底部と思われる緩い段差がわずかに認められる。土塁跡の幅が最も厚い部分は7 mから8 mを測る。5区はこの段差も含めた位置に設定した。調査の結果、4区と同様に表土以下に多数の割石が不規則に混在していた。さらに、調査区の南端から東壁沿いに幅40 cmのサブトレーナーを設けて基底部の断割りを行なった結果、標高約119 mの高さに地山が確認され、それより上に4層から5層の土塁基底の盛土が厚さ50 cmあまり残っているのが観察され、この中に土師質土器と白磁片が混

入していた。また、土壘基底部の内側には25cm大の川原石と割石による列石が確認され、裾固めの石列が存在するようである。そのすぐ北の土壘際の部分は多くの割石が混在し、その間から土師質土器が集中的に多数出土した。なお、裾固めの石列下部が遺構検出のレベルと考えられるが、さまざまな制約により遺物の出土位置と高さを測量し、土壘基底部の状態を確認したのみで調査を終え、遺構の精査はされていない。

出土遺物は多量の土師質土器と白磁、染付が20数片出土している。遺物は全面的に出土するが、土壘の際に特に土師質土器が多かった。このように特に磁器については、4区と5区から集中的に出土する傾向があった。

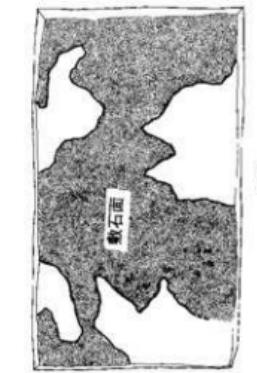
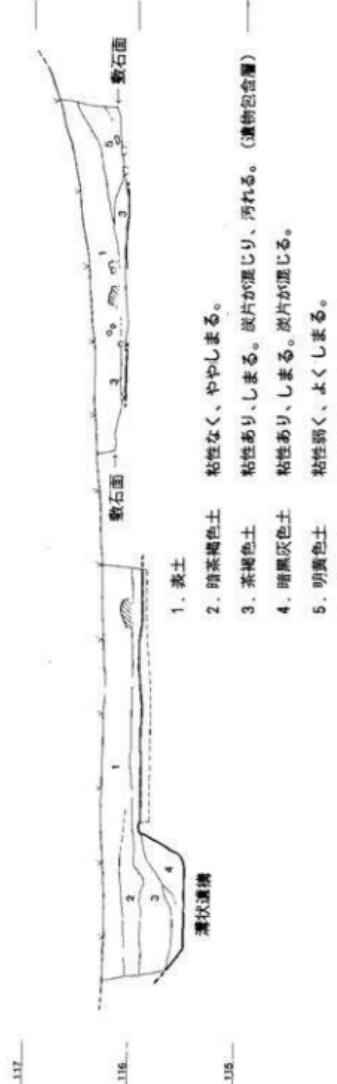
次に二の段の各調査区の結果について概要を述べる。曲輪南端で本丸跡との連絡に関わる遺構の確認と中央部の状態、さらに、北端に推定されてきた礎石を確認する目的で、曲輪の長軸線を基準に5箇所の調査区を設けて発掘を実施した。

二の段の全長は約80mで、南から北にかけてやや西に屈曲した長大な曲輪である。本丸跡との比高差は約1.5m低くなり、全体的に標高116.5m前後で平坦だが、北端には檜台といわれる高まりがある。厩の段からの道が曲輪の西側に登り、この部分は土壘による食い違い虎口となっている。土壘は東側縁辺部では明らかでないが、その他の部分には現況で50cmあまりの高さで明瞭に残っている。

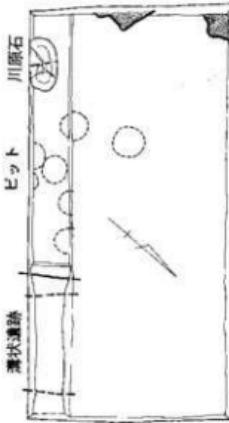
#### (1) 二の段1区（幅2.0m、長3.5m、面積7m<sup>2</sup>）

本丸跡より約1.5m低い二の段の斜面裾部から北に設定した。なお、1区と2区は3区以下の調査区の基準線方向から約15度西に振った基準線を設けて設定した。調査の結果、地表から20cmないし50cmの深さ、標高116.2mでほぼ平坦に人為的な敷石面が発見された。用いられた石材は5cmから15cmほどの割石で、中に8cm以下の砂利数個も混じる。部分的に敷石のない箇所もあったが、堅く締まった状態で、この敷石面は北へわずかに下がっていく。さらに、その敷石面上に30cm大の比較的大きめの割石が固まる部分もあった。また、調査区の南東隅部分はこの敷石面の上に明黄色土が被った状態であったことが注意された。この明黄色土は本丸跡北端の礎石建物に伴う整地のための盛土層で、確認された敷石面は礎石建物より以前の遺構と考えられる。

遺物は表土も含め、土師質土器、瓦などが出土した。破片の状態は細片が多い。



1図



2図

(緑目は断石面を表わす)

第6図 二の段1区・2区平面図及び断面図

瓦は平瓦、丸瓦である。他にキセルの雁首、鉢型土器の口縁、鉄滓も出土している。

(2) 二の段2区（幅2.0m、長さ4.0m、面積8m<sup>2</sup>）

全体的に地表面から約30cmの深さまで発掘した段階で、特に北側の土層が汚れ、土師質土器などの細片が多く混在していたため、東壁沿いに幅40cmのサブトレーンチを設定し、地山を追跡して遺構の確認を行った。この結果、北端部分で明黄色の地山を堀込んだ溝状の遺構が発見された。溝の方向は調査区の長軸にはほぼ直行する向きで検出されたが、北側の肩部は調査区外になるため確認できなかった。幅は1.4m以上で、溝の断面は逆台形を呈し、底部の幅は85cmで南肩部から底までの深さは55cm、標高は約115.5mで、溝内部には2層の堆積土があり、土師質土器がわずかに含まれていた。

さらに、調査区の南東隅近くには50cm大の割れた状態の扁平な川原石が地山上の茶褐色土の上に発見された。その北には、標高115.9mあまりで平坦に確認された地山面上に直径25cmから30cmのピットが7箇所で確認されている。また、サブトレーンチ部以外の発掘面である茶褐色土上面にも少なくとも1穴のピットが検出されている。これらピットは上面観察に留め、発掘はしなかった。

なお、調査区の南端壁沿いにも1区で確認された敷石遺構の一部と思われる割石のまとまりがわずかに認められた。

遺物は表土を含め、多量に出土している。内容は、多数の土師質土器の他、瓦は平瓦が若干で1区よりは量的に少なくなる。白磁、青磁、染付等の磁器は10点あまり、鉢や壺の土器口縁部、鉄滓の他、刀の鈎などがあった。

(3) 二の段3区（幅2.0m、長さ9.0m、面積8m<sup>2</sup>）

二の段の中央部にあたり、地表より10cmから20cmほどで明黄色土ないし赤褐色の風化した岩盤の地山に至る。地山面の標高は約116.2m前後で平坦であったが、特に遺構は発見されていない。東壁沿いに幅40cmのサブトレーンチを設定して、地表面から約40cmの深さまで地山下層の状態を確認して終了した。

遺物は、土師質土器数片のみであった。

(4) 二の段4区（幅2.0m、長さ4.5m、面積9m<sup>2</sup>）

二の段の北端で昭和58年に確認されたという磁石の検出を目的に4区、5区を設定した。一帯の調査前の地表は他と比べて軟弱で、割り石が多数露頭し、現在

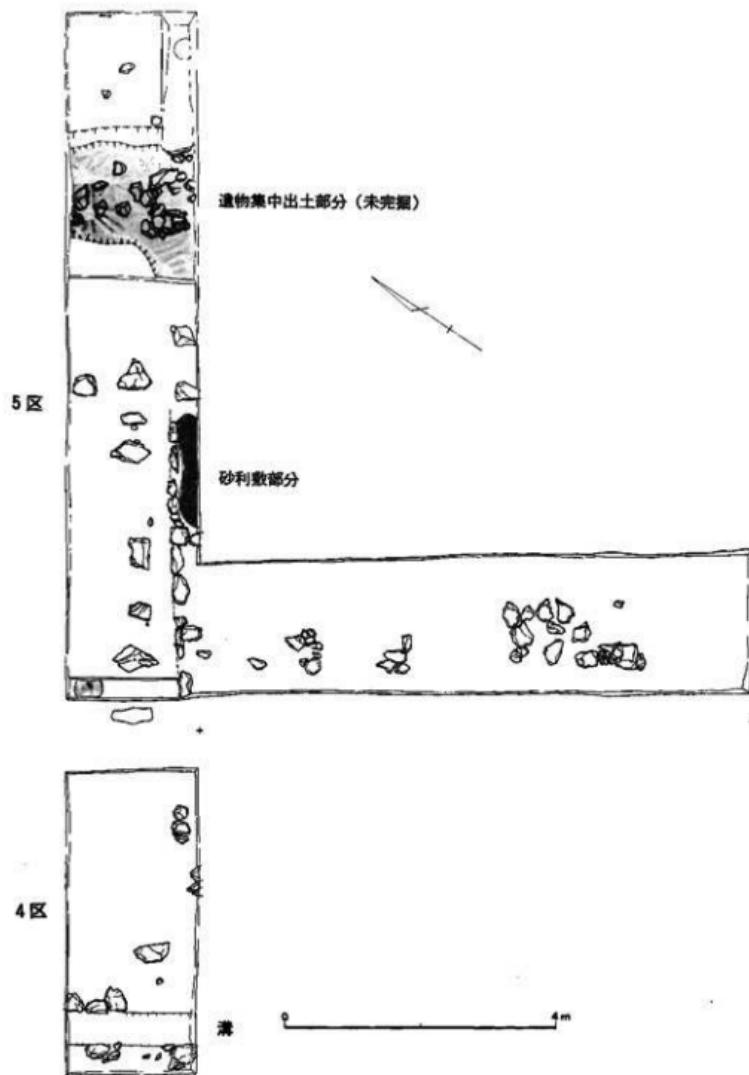
ツツジが植栽されていることから擾乱も予想された。

4区は地表から15cm前後の深さまで表土を剥いだ段階で、調査区の南端近くに曲輪の長軸方向に直行する向きに割石を並べた幅50cm弱の溝状の遺構が発見された。使用されている石材は15cmから50cm大の割石で、大きめの石の面を内側に揃えていたが、かなり石材を抜き取られた状態であった。石材上の高さは標高約116.5mである。溝底部は明黄色から赤褐色の地山が緩くくぼんだ状態であった。なお、この溝状遺構に続くと考えられる石材の上面が調査区の西側に3個ほど地表面に現れている。その他、溝から70cm北に平坦面を上面に向かた50cm大の石材があり、その上の高さは標高116.5mであった。この他、後述する5区から連続すると思われる割石のまとまりが、調査区の東壁沿いに認められた。なお、溝内部以外は地山まで発掘しておらず、遺構を検出した任意の発掘面は標高116mでは平坦で、若干汚れた黄褐色土ないし黄茶褐色土である。

遺物は土師質土器若干と釘状の鉄製品がわずかに出土した。

(5) 二の段5区（幅2.0m、長さ10.0m 幅2.0m、長さ8.0m 面積36m<sup>2</sup>）

二の段北端の檐台といわれる高まりの段差を含め、曲輪主軸上と東側土塁裾までL字状に調査区を設定した。発掘の結果、地表から深さ約15cmまで掘り下げたところ礎石列が発見された。調査区の南寄りに確認された礎石列は、南端から長さ5mにわたって15cmから40cm大の割石を西側に面を揃えて並べており、さらに、ほとんどの石材が平坦面を上にした状態であった。なお、この礎石列に扁平な川原石3個が挟まれているが、その間隔は特に一定していない。この礎石列上の高さは標高約116.5mである。この礎石列の最も北端で、直角に東へさらに伸びていく礎石列の起点ともなると考えられる礎石から南へ幅2mの間は、東壁との間に3cmから7cmの砂利が敷かれていた。建物の一画に砂利敷きの面が存在するようである。さらに、この礎石列の西側には約50cm離れて平行した方向に30cmから65cmの比較的大きめの割石が1.4mから1.5mの間隔で並んでいたが、うち1個は欠いている。礎石列の北には40cm大の川原石があり、さらに40cmほど北には50cm大の大きめの割石が平坦面を上にして存在し、これは東西方向に伸びる礎石の一部と思われる。これらの礎石を検出した発掘面は、特に調査区の西壁沿いは炭の細片の混じる汚れた明黄色から暗褐色を呈する土質で、地山面までは発掘していない。



第7図 二の段4区・5区平面図

なお、調査区の南壁添いに幅40 cmのサブトレンチを部分的に設定したところ、標高約116.3 mに検出された明黄色土の地山の南西隅に直径40 cmのピットが確認された。

調査区の北端は、曲輪北端部の檐台ないし土塁基底部の高まりの斜面までを含めたが、表土を除いた後に東壁添いに幅50 cmのサブトレンチを設定して地山と思われる層まで断割りをした。その北端で標高116.65 mで確認された地山面は南へ下がっていくが、この面に直径30 cmのピット1箇が所発見され、これは地山の上の土層から掘込まれたものと観察された。ここから南の土塁際の部分は北に約5 mにわたって割石と若干の円碟を含み、炭混じりのかなり汚れた土があり、土師質土器を中心に瓦片も混入して多量の遺物が出土する。段差部分に裾固めの石列が存在すると思われたが、この部分は完掘せずに調査を終了している。

東側の拡張区にも割石が20数個あったが、既に述べた礎石に対応するような規則性のある列石はなかった。発掘面は全く汚れない明黄色土の地山と思われる土層である。なお、東端は土塁の裾部まで延長したが、この部分では特に土塁に伴う遺構は確認されなかった。東端の地山は標高116.5 mで、礎石部分の地山と比較して約15 cmほど高くなっていた。

遺物は土師質土器の他、瓦類、鉄製品、銅滓などで、特に未完掘となった土塁際部分に多量に集中し、それより以南の礎石検出部分や東拡張部分からは土師質土器、瓦、鉄製品が若干出土するのみであった。瓦は平瓦、丸瓦若干と巴文の軒丸瓦1点も出土しているが、量的には少ない。

以上述べてきたように、本丸跡と二の段のそれぞれの南北端部から遺物が多量に出土した。代表的なものの写真図版で掲載しているが、遺物の一部について概観しておきたい。瓦は、本丸跡の1区から2区にかけて出土しているが、これは昨年度本丸北端で発見された礎石建物に伴う散布の範囲内のものであろう。二の段の1区や2区から出土した瓦もやはり本丸跡北端の建物に伴うものと考えられる。本丸跡南端部にも建物跡の存在する可能性があるが、今のところ瓦は出土していない。二の段5区の瓦は確認されている礎石建物に伴うと考えられるが、量的には本丸跡北端建物に伴う瓦の量と比較して極めて少ない。本丸跡北東側斜面から多量に表採されている瓦も含め、特に丸瓦裏面の調整の特徴からいわゆる

コピキAタイプのものがほとんどである。

輸入陶磁器は本丸跡の南寄り、4区と5区から多く出土した。いずれも中国製で、伝世品と考えられる13世紀から14世紀の鑄蓮弁文青磁碗、16世紀の古段階の碁笥底の染付皿、染付でも17世紀に近いものも含まれるが、大半は16世紀中頃の明代の白磁、染付である。<sup>23</sup>また、これまで市内では発見例のない陶質の染付も出土している。一方、平成2年度から3年度にかけて実施した三宅御土居跡の発掘調査ではこの時期の遺物の出土量は少なかった。

また、二の段の1区と2区からは鉄滓が数点出土している。これは、昨年度の調査で礎石建物のさらに下層に2基の炉跡が確認され、鉄滓や銅滓、焼土、炭などが集中して出土していることから、小規模ながら鍛冶が行なわれたことが考えられ、これに伴うものであろう。さらに、二の段5区でも銅滓1点が発見されている。

発掘に伴わない遺物としては、昨年度に引き続き本丸跡東斜面の北寄りで多量の土師質土器片と瓦片、磁器も数片を表面採集しているが、斜面の南側にはほとんど散布していないことから、これらは本丸跡北端の礎石建物に伴うものと考えられる。瓦の種類としては平瓦が最も多く、次いで丸瓦があり、巴紋の軒丸瓦も1点あった。二の段の南側本丸跡近くからも数点の白磁、染付と多数の土師質土器を表面採集している。

この他、遺物が採集される曲輪は、昨年度の分布調査の結果、瓦と瓦質土器があった西尾根中間部の土壘を備えた曲輪、染付が採取された廐の段、瓦片が散布する東尾根の中間部の曲輪が確かめられているが、今年度は新たにいわゆる艮の出丸部分でも土師質土器数点と碁笥底の染付1点を採取することができ、今後の七尾城跡における建物の配置を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。

## V. まとめ

旧妙義寺跡発掘調査は結果的に近世以前の妙義寺跡に関わる遺構は確認できなかつたが、第5区で列石が確認され、さらに、量的にはわずかであるが、南北朝期から近世初頭にかけての遺物が整地層から出土したことは一帯に何らかの遺構が存在することが推定できる。今後は同寺などに伝わる境内地絵図や文書の検討が必要である。

勝達寺跡については、平成4年度の調査結果も併せ寺院跡の遺構は確認されず、出土遺物も江戸時代後期以前のものは見当たらない。これまで発掘調査の対象地としたのは現在畠地となっている宅地のない勝達寺推定地の東側であるが、隣接する民家内に井戸が存在することから本堂や庫裏等の遺構は調査地以外の場に存在すると考える他、廃寺後に大規模な地形の変更が行なわれたことも想定できるが、江戸前半期以前の遺物は全く発見されていない。なお、今後は天石勝神社保管の勝達寺に関する文書や絵図、地籍図の検討を行う予定である。

七尾城跡については、結果的に遺構は確認することができなかつたものの、本丸跡南端において輸入陶磁器が多数出土し、本丸跡の北端とともに比較的広く整地されていることから建物跡が存在する可能性が高く、今後も継続調査の必要がある。

二の段の1区と2区は、昨年発見された本丸跡北端の礎石建物との連絡に関わる遺構の確認のために設定した調査区であるが、1区で発見された敷石遺構は南東隅部分が礎石建物に伴う整地のための土層が被った状態であったため、礎石建物以前の遺構と考えられる。また、2区からは幅1.4mほどの溝状遺構が確認された。これらの遺構は最終的な曲輪の形態以前のものと考えられる。

さらに、二の段の北端、櫓台の高まりの南側には礎石が発見された。多くの石材が失われているが、曲輪の主軸線に添う方向に、あるいは直行する向きで列石が確認された。中に砂利を敷いた区画もあることから、間仕切りのある、場合によつては複数の建物が想定でき、その規模や形態は今後の調査に期待される。なお、瓦片の出土は今のところ少ない。

以上のように、本丸跡部分では北端の礎石建物の他、南端にも建物跡が存在する可能性があり、二の段北端部にも礎石建物跡の一部が発見された。ともに長大

な曲輪の端部に遺構が存在する可能性が明確となった。また、二の段の南端部に検出された敷石や溝の遺構は、曲輪の改修の変遷を解明するうえで貴重な成果である。なお、本丸跡、二の段ともに曲輪の中央部分は遺構の存在しない空間であった。

七尾城内における建物に関連しては、文献資料からもうかがい知ることができる。益田家文書第八十五巻によると19代藤兼が城内に11名の家臣を置き、さらに城山の滝尾の南にある大手の曲輪に1ヶ年隠居したとの記述が見える。<sup>23</sup>また、小国彦兵衛輯錄「牛庵様御代覚書」によれば天正11年（1583）に元祥が下城したとある。<sup>24</sup>以上のことから藤兼、元祥の時代の一時期に七尾城内に居住したことが記録にも残り、また、発掘調査でも証明されつつあるといえる。

以上のように、平成5年度の益田氏関連遺跡群発掘調査から多くの成果が得られたといえるが、特に七尾城跡の発掘調査は諸般の都合により完掘できなかった箇所があり、この部分については調査を継続する必要がある。また、関連資料調査もを行い、妙義寺では天正期以前の文書十数通や近世の妙義寺境内絵図を確認し、天石勝神社の資料調査では近世の勝達寺に関する資料が保管されていたが、これらを踏まえた検討はできなかった。このような文献資料と出土遺物については整理したうえで次回に報告する予定である。

また、七尾城跡の詳細地形測量図は平成4年度に本丸跡を中心に、今年度は本丸跡の南と二の段以北の東尾根の曲輪部分を作成したが、西尾根上の曲輪群や大手といわれる中央谷あいの部分は平成6年度にさらに継続して作成し、全体地形測量図を完成させる予定である。

## 註

1. (1) 1991『三宅御土居跡 I』益田市教育委員会  
(2) 1992『三宅御土居跡 II』益田市教育委員会
2. (1) 1975『益田市誌』上巻 益田市誌編纂委員会  
(2) 1979 広田八穂『中世益田氏の遺跡』  
(3) 1985 広田八穂『西石見の豪族と山城』など
3. (1) 註 2 (2)  
(2) 1992『上久々茂土居跡』島根県教育委員会  
(3) 1994『上久々茂土居跡・大峠遺跡－一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』島根県教育委員会
4. (1) 註 2 (1)  
(2) 1990 永見勝徳『萬歳山妙義寺史』など
5. (1) 1958 矢富熊一郎『石見染羽天石勝神社史』  
(2) 註 2 (1)など
6. 註 2 (1) 掲載「石勝神社勝達寺の古図」なお、原資料については所在が不明である。
7. 平成2年6月に佐々木一三氏の協力により、三宅御土居跡一帯の地籍図(美濃郡上本郷村地図第四号)とともに益田市役所書庫で発見された江戸末期の上本郷村絵図
8. 平成6年3月12日、3月17日に実施した天石勝神社保管資料調査により確認された、延享三年(1746)五月二十日付け覚書(本書P37、写真図版5参照)
9. 1989 的野克之「開館三十周年記念島根の秘仏展を開催して」『博物館ニュース』No.55 島根県立博物館
10. 1993『益田氏関連遺跡群 I』益田市教育委員会
11. (1) 1965 矢富熊一郎『益田七尾城史』  
(2) 註 2 (2)  
(3) 註 2 (3)  
(4) 1991 寺井毅「石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城の畝状堅堀群についての考察」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会など
12. 「周布吉兵衛文書」(1970『萩藩閥閥録』山口県文書館に拠った。) (本書P29 資料1参照)
13. 益田家文書八二ノ三七「大内氏老臣連署書状」  
(1994『史料集・益田兼見とその時代』に掲った。)  
(本書P29 資料2参照)
14. 益田家文書八五「元祥已下諸控物併中間申談之書付共十八通」(益田市立図書館所蔵益田家文書解説原稿に掲った。) (本書P29 資料3参照)
15. 註 12
16. 註 14
17. 1993『親興公御廟參日記』七尾郷土史会(本書P30 資料6参照)
18. 註 12
19. 註 2 (3)
20. 註 2 (3)
21. 註 10
22. 输入陶磁器の時期については広島県立美術館主任学芸員村上勇氏にご教示をいただいた。
23. 註 14
24. 小国彦兵衛輯錄「牛庵様御代覺書」註3 (1)、註10 (2)などに引用されているが、原資料については確認していない。なお、東京大学史料編纂所所蔵の益田家文書には含まれていない文書である。(本書P30 資料4参照)

資料一 周布吉兵衛文書

石見国周布郷内村地頭孫六藤原兼茂謹言上

右、当國跡起之間、屬三隅二郎入道伸性、橋篠河内城之處、  
朝敵人大将益田二郎太郎兼行、同舍第三郎・乙吉十郎以下  
之輩、率數千騎之軍勢等、橋篠益田城之間、今月廿一、日  
押寄彼城、實破北尾崎木戸、致散々合戦、大森代大進房首  
取事、仍大將三隅太郎兼知見知之上者、早賜御一見狀、為

備上翼、相言上如件、

延元々年七月廿六日

承候了 (三隅兼連)  
沙弥 信性判

南者安芸堺石見之内三萬迄

此間拾一里拾武丁

西者下黒谷丸毛要善迄

此間五里武町  
東者属布川限り

南北へ式拾里拾五町  
右者石州御領之分

東西へ拾六里拾町

(略)

一、御城山 = 被爲置候者

益田彦右門 益田刑部

益田伊兵衛 宅野筑前

小原日向 大谷大炊

二保 二郎兵衛  
益田伊賀 品川次郎門

糸賀右近

一、御城山滝尾之南、大手の曲輪 = 一ヶ年及御隣居候而、其  
間 = 正路の御普請成就仕後地被成御引起十年及御隣居而、  
大正十七年 = 三隅之大寺へ御引越、八年被成御座、慶長

六年梅月朔日 = 御六十八歳にて

資料三 元祥(?)下諸控物中間申談之書付共 十八通

全朝様御領知之事

東者安芸堺石見之内三萬川迄  
此間拾一里八町

資料二 大内氏老臣連署書状

先日進状候之処、委細御返事承候了、就其益田免向事、今  
月中色々可打入候、今度者差寄七星城、三計可被取候、仍

一城事者、遠田内 = 可被執候之間、彼城者可有御持之由被  
申候之処、遠田少所候間、為一力不可叶之由承候、其段則  
令被露候之處、左様少所候者、長野庄安富入道一城可持候、  
是も料所最少所候之間、一城為一力難持候、彼 = と御寄合  
候て、半城可被持之由被申候、可為如何様候哉、益田・同遠  
田辺、不減城々被成料所候、誠不被持候者、隨望可被計之  
候、可有御持候者、無是非候、陣取以前御左右可承候、為  
後日如此令申候、雖少所候、遠田事ハ御由緒之由承候へは、  
御持候者可然候、宣為御意候、恐々謹言

六月九日

良智 (花押)

重連 (花押)

永安左近特監殿

## 資料四

小国彦兵衛輯錄「牛庵様御代覺書」

## 資料六

親興公御廟參日記

弘化二年九月

親興公若日那様石州益田江  
御先祖様為御廟參真之御忍

にて被遊御越候節日記

(略)

## 資料五

### 覺

一龍藏權現御殿	三間四面	但し枯葺
一同 拝殿	縦七間	但し八尺間
	横四間	
一春日明神五社	各壹間四面	但し板葺
一牛玉堂	壹間四面	但し枯葺
一王子堂	五尺四面	但し板葺
一稱何堂	四尺四面	但し板葺
一本堂	縦七間	但し枯葺
一護摩堂	横六間	
一大門	武間半四面	但し枯葺
一庫裏	縦二間	但し枯葺
	横八間	
	縦拾間	
	横四間半	

延享三年五月廿日

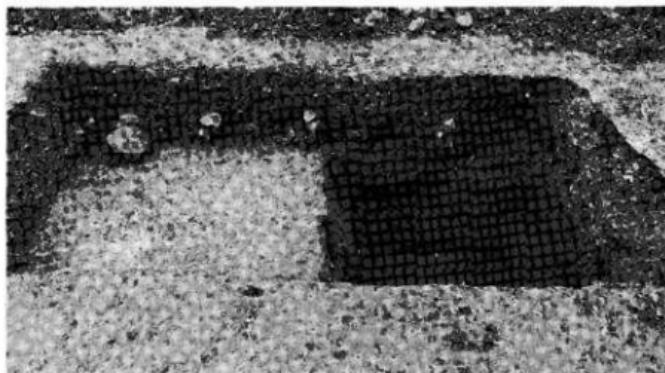
勝達寺

(略)  
一、七尾山上東の丘、千畳敷広き平地  
なり、すべて竹山なり。今に至つて土を  
掘り候へば瓦屑など出候由、それより山  
統きにて、尾七つこれある故に七尾山と  
唱え候由。これより北尾山統き土地を残ら  
ず壇に切りこれあり、天守台と言ひ伝え  
の所あり、谷これあり。すべて土地壇に  
切り、この辺尤も大竹多し、この所に  
馬糞井と申す井戸これあり、至つて深し。  
この峰を越え後ろに谷これあり。谷を渡  
り候ては誠に深い山統きにて、幾里と云  
うことを知らず。山上より御下向、拜殿  
へ御いで遊ばされ至つて眺望(せんぱう)  
宣しき所なり、益田郷眼下に見え候、住  
吉社山下古筋と申し候て川これあり、こ  
の所いけす茶屋これあり。

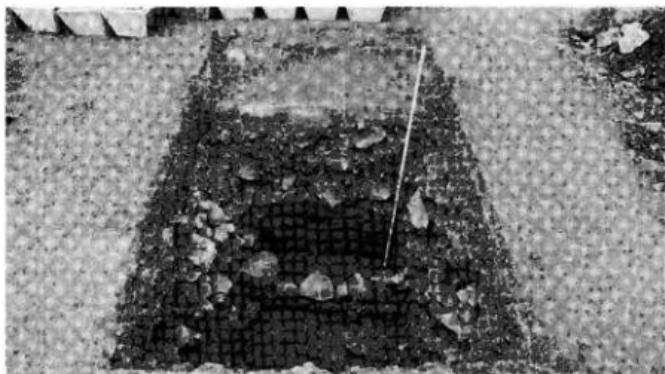
図版 1



旧妙義寺跡  
調査区配置  
状況（西から）

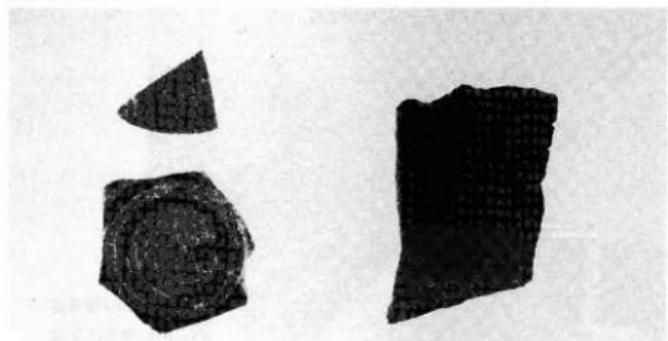


旧妙義寺跡  
第3区発掘状況  
(南から)

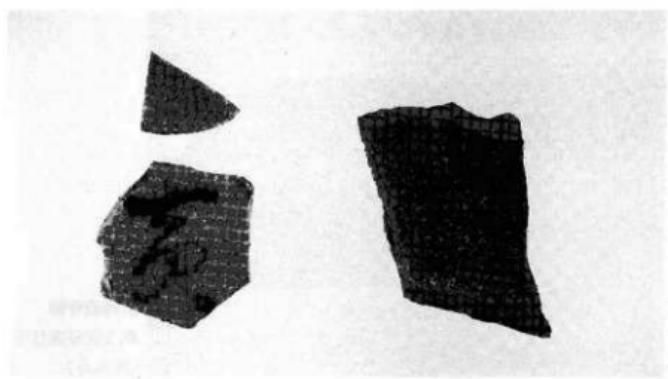


旧妙義寺跡  
第5区発掘状況  
列石造構  
(西から)

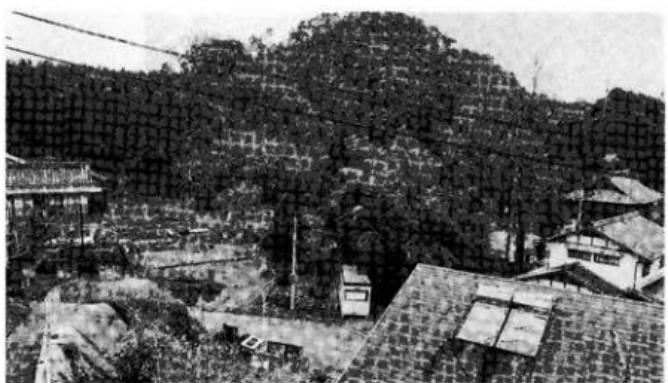
図版 2



旧妙義寺跡出土  
青磁、染付、陶  
磁器（外面）



旧妙義寺跡出土  
同  
(内面)



勝連寺跡遠景  
(南西より椎山  
から望む)

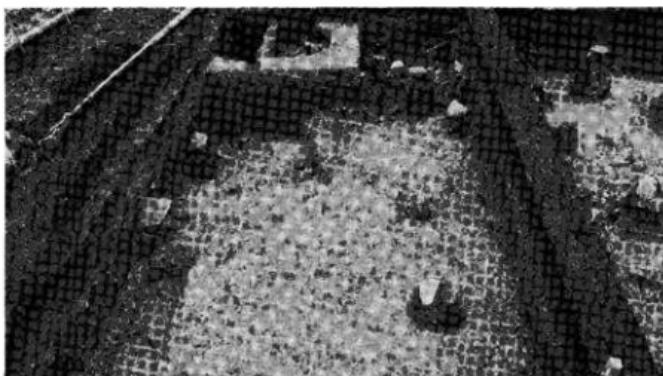
図版 3



勝達寺跡  
調査区配置状況  
(北西から)

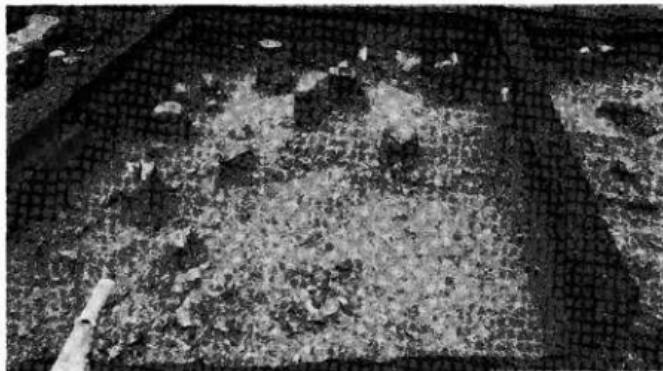


勝達寺跡  
第1区発掘状況  
(南東から)

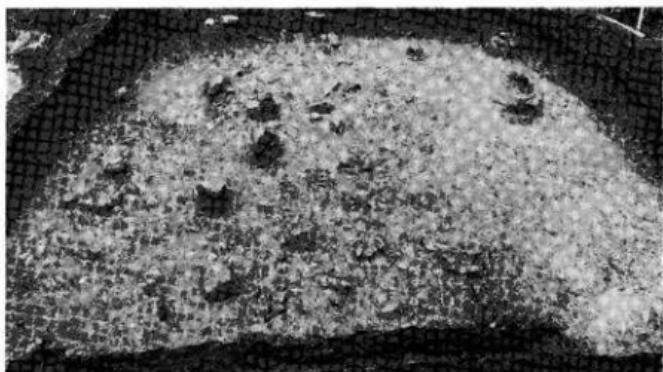


勝達寺跡  
第2区発掘状況  
(北東から)

図版 4



勝達寺跡  
第3区発掘状況  
(北東から)



勝達寺跡  
第4区発掘状況  
(北東から)

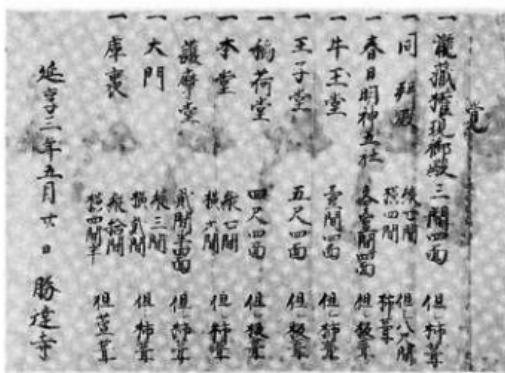


勝達寺跡  
第5区発掘状況  
(南東から)

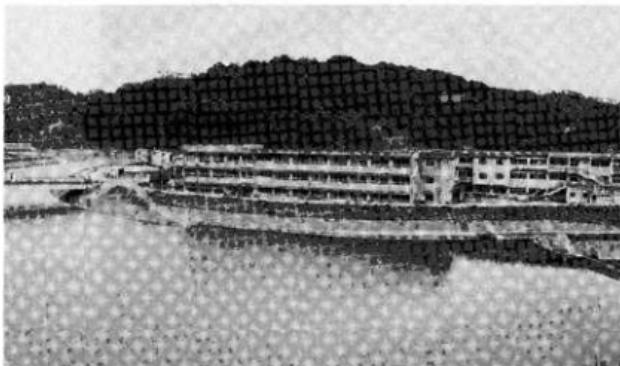
図版 5



勝達寺跡  
第6区発掘状況  
(南東から)



延享三年勝達寺  
覚書(染羽天石  
勝神社所蔵)



七尾城跡遠景  
(北西より椎山  
から望む)

図版 6



七尾城跡  
平成4年度発掘  
礎石建物（本丸  
跡北端 南から）



七尾城跡  
本丸跡1区、2区  
発掘状況  
(北から)



七尾城跡  
本丸跡4区発掘  
状況（東拡張部  
を東から）

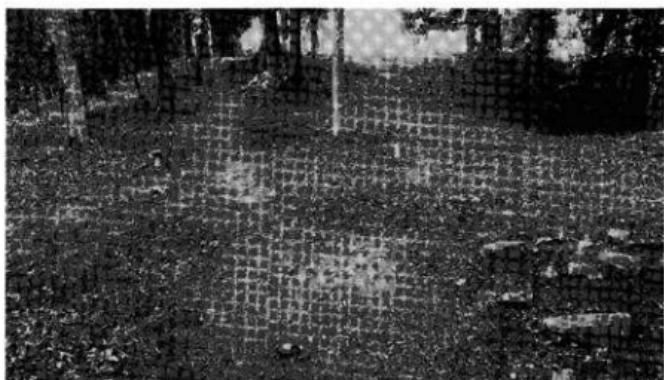
図版 7



七尾城跡  
本丸跡 5 区発掘  
状況（北から）

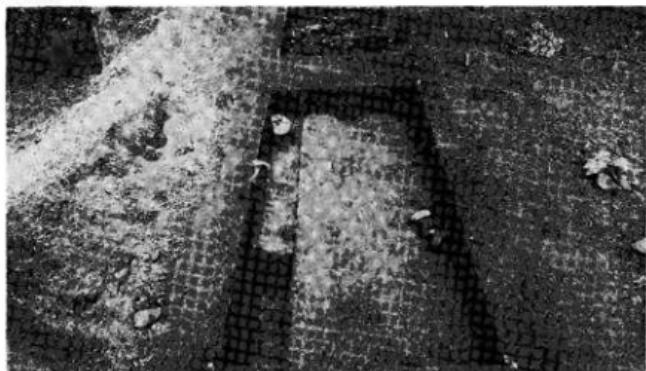


七尾城跡  
本丸跡 5 区  
土壘基底部分  
(北から)



七尾城跡  
二の段と本丸跡  
の段差（北から）

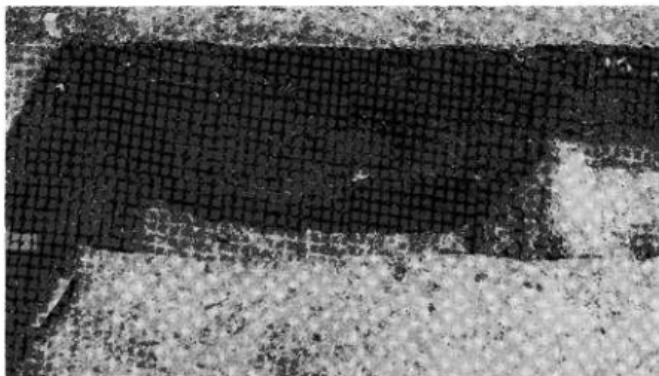
図版 8



七尾城跡  
二の段1区、2区  
発掘状況  
(北から)



七尾城跡  
二の段1区  
敷石造構  
(西から)

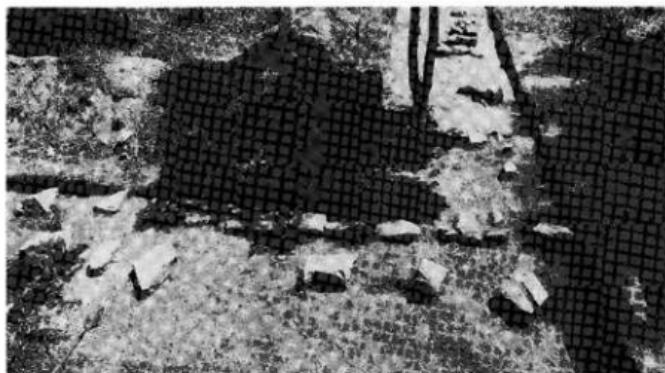


七尾城跡  
二の段2区  
溝状造構  
(西から)

図版 9



七尾城跡  
二の段4区  
溝状造構  
(西から)



七尾城跡  
二の段5区  
礎石列  
(西から)

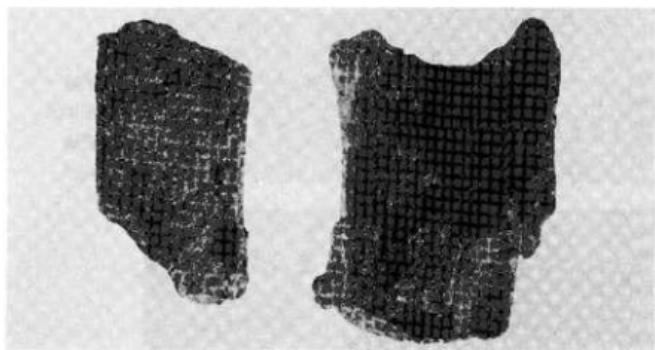


七尾城跡  
二の段跡5区  
砂利敷部分  
(西から)

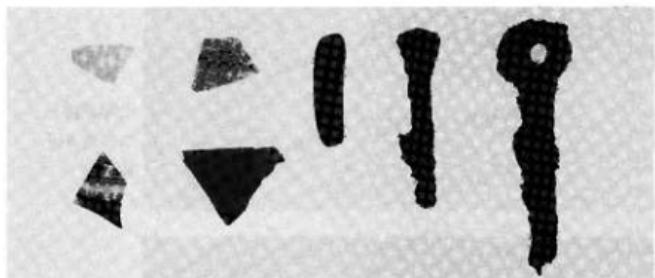
図版 10 (七尾城跡出土遺物)



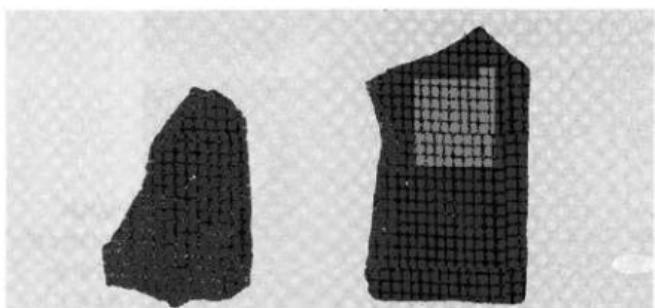
本丸跡 1 区出土  
遺物（染付、鐵  
製品）



本丸跡 1 区出土  
遺物（瓦）



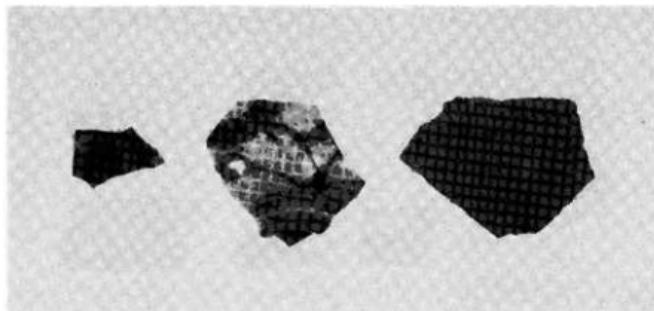
本丸跡 2 区出土  
遺物（白磁、染  
付、青磁、土錘、  
鐵製品）



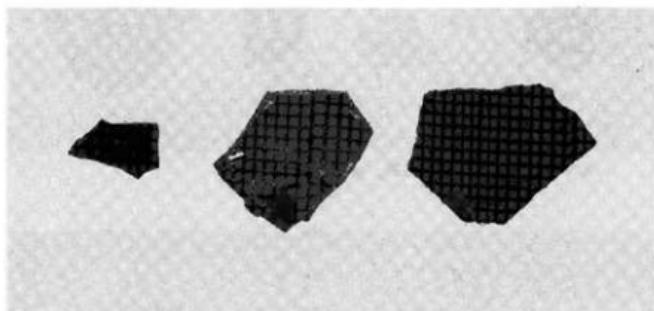
本丸跡 2 区出土  
遺物（瓦）

(七尾城跡出土遺物)

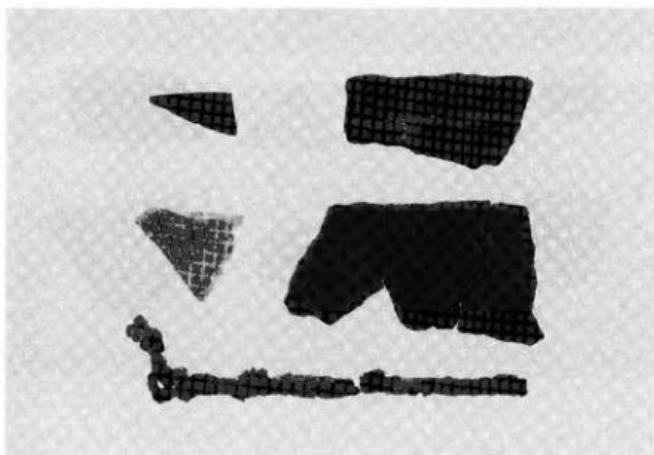
図版 11



本丸跡 3 区出土  
遺物（青磁、染付、土器）外面

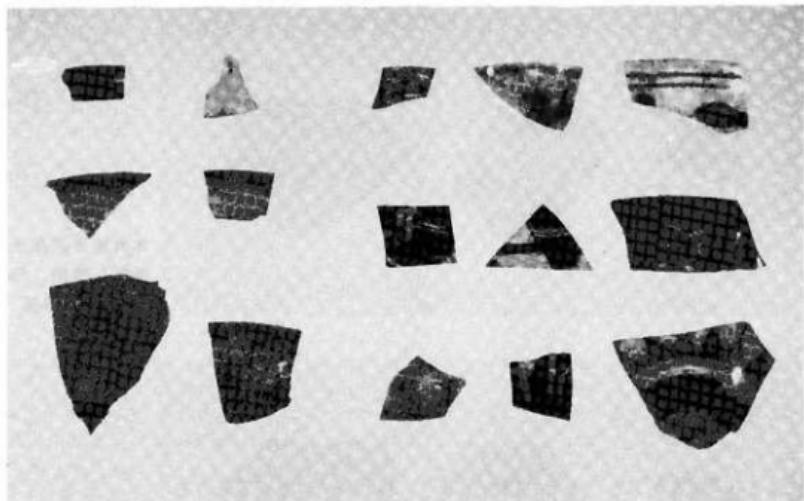


同 内面

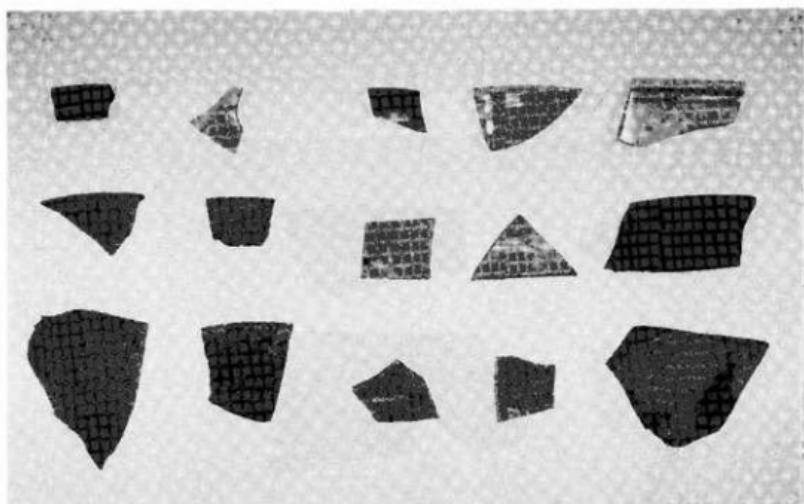


本丸跡 4 区出土  
遺物（土器、鐵  
製品）

図版 12 (七尾城跡出土遺物)

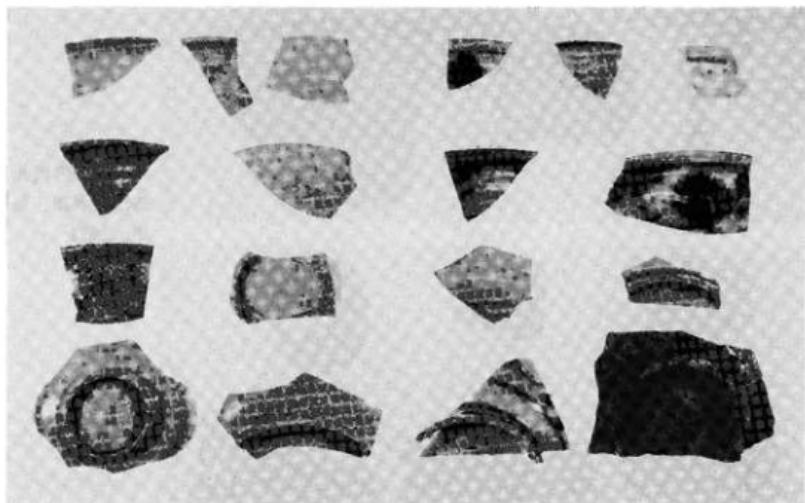


本丸跡4区出土遺物（白磁、青磁、染付）外面

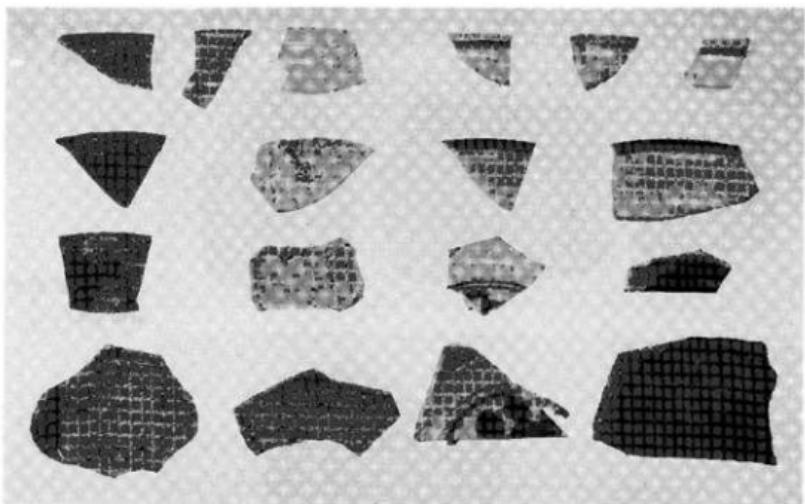


同 内面

(七尾城跡出土遺物) 図版 13

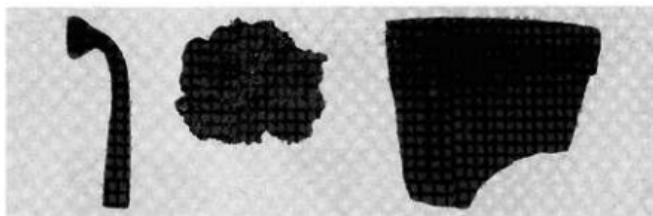


本丸跡 5 区出土遺物（白磁、染付）外面

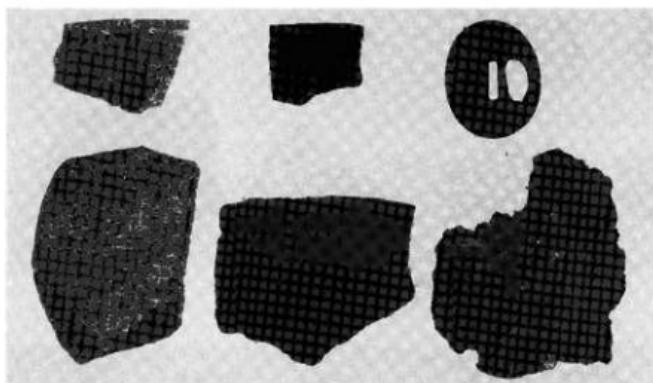


同 内面

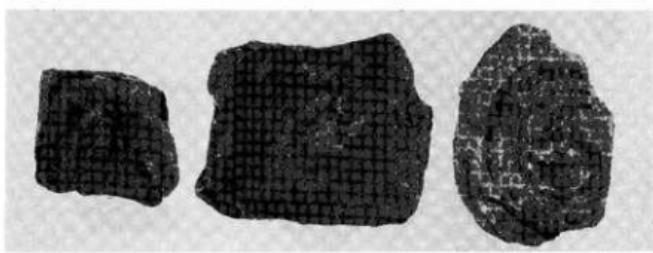
図版 14 (七尾城跡出土遺物)



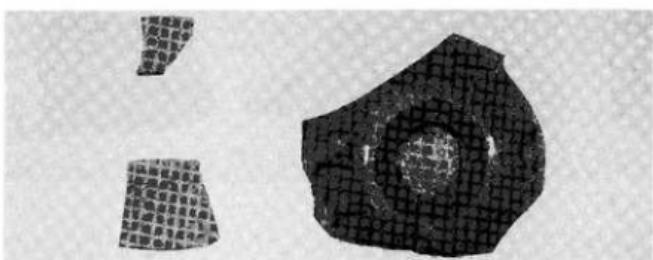
二の段 1 区出土  
遺物（雁首、鉄滓、土器）



二の段 2 区出土  
遺物（青磁、鍔、  
土器、鉄滓）



二の段 5 区出土  
遺物（瓦）



良の出丸表採遺  
物（白磁、染付）

---

益田氏関連遺跡群 II

平成 6 年 3 月発行

編集・発行 益田市教育委員会  
島根県益田市常盤町 1 番 1 号  
印 刷 富士印刷株式会社  
島根県益田市あけぼの東町 8-13

---